仁義

何ぞ必ずしも利と曰はん。亦た仁義あるのみ。（孟子）

或時孟子が梁の惠王と云ふ王に見へて、道を說かんとしたところが『左樣お前の話を聞て如何いふ利益になるか』と惠王が尋ねられたから、孟子は答へて『サアー夫が不可ないのである、王は朝から晩まで、己れの利益ばかりを考へて御座るから、今日の樣な亂世となつて仕舞つたのである。王樣が利益々々といふから、大臣も利益々々といふ、大臣が利益々々と云ふから、局長も課長も皆己れの利益ばかりを考へ、小使小僧の末に至るまで皆利己的の人間となり、今日は見るもの聞くものも、皆泥棒沙汰にあらざるはない。王がもし本當に王たる資格を具へて、國を治めんと思ひ給はゞ、利益とか損失とかと云ふ事を止め、只だ仁義の道より外は無い』といつた。ア、昔も今も稍もすると、そういふ社會になり易いが、孟子とか、孔子とか云ふ先生達が出て、此狂瀾を回した如く、我等も亦『道の會』などを以て此の狂瀾を回して今日を救はねばならぬ。

義あるのみ

大人は、言信を必とせず、行果を必とせず。惟義の在る所のまゝなり。（孟子）

此れは自己の言ふことを必ず信じて貫ひたいとか、自己の行ふことには、必ず好結果を見たいとか、ソンナ事は第二として、唯だ自己の言ふて居ること、自己の行ふて居る事が、義であるか、如何を考へてやれば其れでよろしいとの意味である。即ち何事にも慾があつてはならぬ。人に信ぜられたいと思ふと直ぐに慾に陷る。好結果を見たい、即ち成功したいと思ふと、又直に慾に陷る。故に唯大となく小となく、義しいと思ふ事を言ひ、爲すべ

きと思ふことを爲して居れば、一番安心で危險が少い。而して其れでこそ本當の仕事が出來るのである。大人と小人との區別は卽ち其末を求むるものと、其本に據るものとの區別である。

君子と小人

君子は義に喩り。小人は利に喩る。（孔子）

何事を爲すにも損であるとか得であるとか、利であるとか害であるとか考へて事を爲すものは皆小人であつて、此が義であるとか、道であるとか、爲すべき事であるとか、爲すべからざる事であるとかと、只管正邪曲直を判斷して事をなすものが君子である。かく云ふと今時の人は、其れは舊式の道德で、今日は何事も利害で万事を處理する樣になつてゐる。外交問題でも、戰爭問題でも皆其れであつて、國家問題でも、社會問題でも多くは

皆利害問題に外ならぬと謂ふが、然し其れが本當に國家社會の爲めにと思ふなら、矢張り義であるのである。外交問題でも戰爭問題でも、社會問題でも、已に國民の爲めを圖ると云ふことになると、それが義となるのである。此處に云ふ利とはかの國家も社會も考へない我利〳〵連中を云ふので、たとひ利益を主とする事業に從事しても、人と國との爲めに圖る人間は、皆義の方の人であると斷ぜねばならぬ。

眞の勇

義を見て爲ざるは、勇無き也。（孔子）

勇氣と云つた所で、無暗に亂暴を働いたり、猪武者に荒れ廻る如きは、眞の勇ではなく暴である。勇とは道に據つて立つものでなければならぬ。昔で云ふなら、君辱しめらるれば臣死すぢや。今でも其の恩人が罵られるとか、其の師と仰ぐ人が嘲けらるゝとか、其親

友が誹られる時には、憤然起つて、之れが辯護を爲ねばならぬ。然るに左樣云ふ時に、側に居ながら、己れの恩人でない樣な、己れの先生でない樣な、己れの親友でない樣な顏をして無言つて控へて居るものがある。其は義でない卽ち勇者でない。

學習

學んで時に之を習ふ、亦說ばしからずや。（孔子）

人間は死ぬまで學問せねばならぬ。又學んだ以上は之を實際にやつて見ねばならぬ。學ぶ氣のない人は進步せぬ向上せぬ。舜と云ふ唐土の聖人は、聖人であるのに、尙ほ人より物事を聞くことを樂みとしてゐた。ワーレースと云ふ大學者は、今年九十歲であるのに、新に研究した社會問題の書を著はした。凡て何事に關しても、いつも新しきことを學んで之を實際に行つて見て居る人でなければ、進步發展する人でない。又學習の愉快を知らぬ

人である。

眞の學者

父母に事へては、能く其力を竭し、君に事へては、能く其の力を致し、朋友と交り、言ひて信あらば、未だ學ばずと云ふと雖も、吾は必ず之を學びたりと云はん。（子夏）

古の學問は人の道を行ふ爲の學問であつた。是故にたとひ學問せずとも、實際に人の道を行ふて居る人ならば、之を學問した人であると申して支障ないとの事である。

そこで無學文盲の人でも、忠孝信の之を行ふて居るものは學者で、之れに反するものは無學者であるとすれば、今日の所謂學者先生は大抵無學者であつて、本當の學者は、却つて文盲の人や、正直な田舍者に多いかも知れない。

孝弟

孝弟は、其れ仁を爲すの本か。（孔子）

孝とは親孝行の事、弟とは兄や、恩人や、先輩を敬ふ事である。金があつても、位があつても、學問があつても、親を粗末にする者は人間の屑であつて取るに足らぬ、之に反して他に少々不都合があつても、親を大切にするものであるならば、大抵の事は恕して宜しい、又た少しく出世をすると、弟の癖に兄を侮るとか、先輩や恩人に對して横柄なる振舞を爲すやうなものは、人非人であつて論ずるに足らぬ。それに反して幾ら出世しても、舊に依りて渝らず、どこまでも以前の態度を維持して居るものは、立派で奥床しい。即ち是れが人の道の本であるから、人の道に志すものは、先づ此孝弟より始めねばならぬとの事である。

信用

人として信なくんば、其の可なるを知らざるなり。大車に輗なく、小車に軏なくんば、其れ何を以て之を行らんや。（孔子）

之は予が『論語講義』として『道の會』で述べた一節である。『人として信無くんば』とは、人として信用がなければとの意味。『其の可なるを知らず』とは、可いところが無くなるとの意味。『大車に輗なく』とは大きな車に輗といつて牛が胸で前へ押して行く横木が無ければとの事。『小車に軏無くんば』とは小さな車に軏といつて馬が牽いて行く後の車に付いて居る横木である。『何を以て之を行らんや』とはどうして車を行る事が出來やうか、出來ないとの事である。

ソコで此の全體の趣意は、如何なる立派な人間でも、信用の出來ない人は役に立たぬ。大きな車があつても、輗のない樣なもの、小さな車なら軏の無い樣なもの、馬もある、牛もある、車も皆立派に揃うて居る、然し輗がない、軏がない、而して此れ無ければ車を率いて行く事が出來ないから、何にもならぬ。其通り人に信用と云ふものが無くなつたら、如何なる人でも用ひらるゝ事が出來ない。例へば道の會の講師に就て云ふても左樣で、いくら博士でも、學者でも、辯者でも、約束を守らぬ人は講師に賴む事が出來ない。それは此道の會は信用を重んずるから、若し約束を重んぜない人に賴んで置いて其時に輕く斷はられるか、忘れて仕舞はれる事があつたら、折角チラシを出して人を集めて、ペテンをかけた樣になるからである。世の中には承知も爲ない人の名前を出して置いて其時になつて聽衆によい加減の斷りをする會が多くあるから、それと一樣に見られる事を厭ふからである。百事共通りで、此約束を守らない人は、いくら善い人であつても、手腕家であつても外に感心する事があつても、當てにならぬから、今日の世の中には通用しない。丁度車や

馬や牛は整ふて居ても、輗と軏の無い樣なものである。其外物を借りて返さなかつたり、サンザ世話になつて出て行つた後で、一向消息も爲なかつたり、返事書くべき手紙を怠つて居たり、腕がありながら、仕事をさせば杜撰な事をしたり、時間に遲れたり、懶けて義理を缺いだり、いろ〳〵信用を失ふべき個條はいくらもある。殊に金錢に就ては非常に注意を拂はねばならぬ、借りたものなら借りた、貰つたものなら貰つたと、其間に區別を付けねばならぬ。借りたのか、貰つたのか、譯の分らぬ樣な借り方をして、其後何とも口に出さず、催促するとよい加減な事を云つて居る樣な人などには、世に信用せらるゝ筈がない。尤もいくら正直で約束を守る人でも、他に信用のない事がある。それは其人の才と腕とに關することである。此前にも申した通り、馬鹿正直では仕方がない、使にやれば必ず其使命を全うして來る、談判にやれば負て來ない、物を命ずれば、命令以上に仕事をするなどと云ふことは、才と腕とである。故に人は才と腕との信用をも博して居らねばならぬ。いくら宗教家でも、道德家でも、此才と腕とがなければ、矢張り大車に輗なく、小車

に軏なき類で、仕事の上に信用を置く事が出來ぬから役に立たぬ。

ソコで道德と才能、此二つが並行して始めて信用のある人物となるのであるが、兎角此二つが揃はないので困る。役に立つ奴は横着く、正直な者は役に立たず、此二つを兼ね備へて、此世で立派に成功して行くのが道の會員の心得べきところであると承知して貰ひたい。木戸さんや西鄕さんや大久保さんなぞは、此兩方を備へて居つた人である。西園寺さんや、山本さんや、桂さんは、此半分を備へて居る人である。そして滔々たる多くの人は此兩者とも備へて居らぬ人である。ソコで日本も追々心細くなつて來た。イヤこれは思はず知らず國家の事に心配して居るから、英雄豪傑を出したが、ナニ英雄や豪傑にならなくとも、店や會社や小使部屋に居ても、それ相應に才德兼備の小英雄となつて貰ひたいものである。一言にて云へば、人間は信用が資本である、此信用さへあれば金も出て來る、人も扶けて呉るが、此信用を失へば、いくら人を怨んだり、世を尤めたりしても仕方がないつまる處尤むべきは己のみである。孔子の時代は今より二千何百年も前であるが、此等は

所謂る千古の格言である。

悔改

過てば則ち改むるに憚かる勿れ。（孔子）

過は誰にでもあるのである。只だ之を改めるか改めぬによりて、君子と小人との區別が生ずるのである。ハイ私が惡う御座りましたと、早くあやまれば、其で相方とも快よくすむのである。其れを色々と言譯をするが故に、嘘言を吐く、嘘言を吐くが故に、辻褄が合はなくなつて、益々あやまり難くなるのである。其故に何んでも思ひ切つて最初の内にあやまつて仕舞うのである。一寸其時には苦しいが、其代りに後腹が痛まない。

禮儀

禮の用は和を貴しと爲す。（孔子）

ハイハイヘイ〳〵と丁寧なる言葉を使つたり、首を垂れ腰を屈めて、非常に敬意を表する如く見ゆるも、其實はアア面倒臭いと心の中で思ふて居ると、自然に其が表はれて、却つて無駄の待遇となる。それに反して何がなくとも、善い心で親切でさへあれば、客も必ず滿足する。

忠恕

夫子の道は忠恕のみ。（曾子）

『孔子の說かるゝ道は忠恕の二字である。』

忠とは忠實の事で、恕とは同情の事である。忠實と同情、此の二ツで孔子の道は盡きて居る。心に兩面があり、仕事に表裏があるのは忠實でない。位は高くなる、金は出來る、欲いものは何でも得られる身分となつても、更に同情心がなく、『貧乏して居るのは懶惰る結果である、物を人に賴むのは獨立心の無い爲めである』と考へ、難澁して居るものを見れば、『其れで人になれるのである』と論ずるような人は、己れの成立をも知らぬ愚かなものである、自己が其れ迄になつたのも、己れ一個の力ではない、色々と天よりも惠まれ、人よりも扶けられたからである。故に獨立を奬勵するのは可いが、上に立つものは、同情心を以て人と世の爲めに盡すところがあらねばならぬとの事である。

人より學べ

賢を見ては、齊しからん事を思ひ、不賢を見ては、內に自から省る。（孔子）

『善い人を見ては、あの人の如くなりたいと思ひ、惡い人を見れば、あの人の如くなりてはならぬと省る。』

如此云ふ風に考へて人に交はつて居れば、見る人、聞く人、會ふ人、語る人が皆己れの爲めになるのである。然るに多くの人は只だ人を批評するばかりで、一向己れに得るところなく、却つて其德を傷けて居る。料見の善い人と惡い人との區別は此處に在る。

伯夷叔齊と云ふ人は、舊惡を念はなかつたから、怨む事が少なかつた。舊惡とは曾て己れに惡い事を仕向けた人の事を謂ふのであるが、此の曾て己れをヒドイ目に會はせた人の事を忘れて仕舞ふと謂ふことは、ナカ〳〵六ケ敷ものである、然し之を覺えていつまでも怨んで居ると、其心が君子になれぬから、道に志すものは、ウント思ひ切つて伯夷叔齊とならねばならぬ。

折られたる人にも匂ふ梅の花

人を知る事と、人に知らるゝ事

人の己れを知らざるを患へず、人を知らざるを患ふ。（孔子）

人が己れの心を知つて呉れぬ、己れの價値を知つて呉れぬと云ふことは患へないが、どうも人を知ることが六ケ敷ので、吾は之を患へて居ると孔子は言はれた。何事も人に在るのである。人を得ると得ざるとに由つて、國でも、店でも、會社でも、學校でも、教會でも盛んにもなり、又た衰へもする。然し此人ならばと思ふて信頼して居ると甘く欺されてヒドイ目に會ふことが多いが、孔子も隨分欺されたにより、嘆息の餘りに此言を吐かれた樣である。是故に凡そ事を爲すものは、人の己れを知つて呉れぬのを患へず、先づ人を知ることの六ケ敷のを患へねばならぬ。

人物の鑑定

其の以す所を視、其の由る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人焉んぞ廋さん哉、人焉んぞ廋さん哉。（孔子）

『其行ふて居るところを視、其動機の起るところを觀、其滿足して居るところを見ると、人は大抵廋すことの出來ないものである。』

孔子も人を見ることが出來ないで困つたから、其人を見るの法を研究せられて、かくの如く言はれたのである。

先づ其行ふて居る事を見るのは肝腎であるが、其ればかりでは不可ぬ、國の爲とか、人の爲めとか云ふて、年中休みなく運動し、慾を制し、情を矯め、克己復禮の生涯を送つてナカ〳〵外貌では仁人君子の如く見へても、其動機が、自己の名利より出て居るものがあ

るなら駄目である。依つて此人は什麼な處で滿足して居るのか、安んじて居るのか、己れの名利を離れて、只だ本當に人と社會を思ふて居る人か什麼かを研究して見ると、大抵の人は廋すことが出來ず、其本體が知れるものであるとの事である。

人を用ゆる法

直を擧げて、諸を枉れるに錯く時は、則ち民服せん。枉れるを擧げて、諸を直きに錯く時は、則ち民服せず。（孔子）

『何事を爲すにも、直な人を用て、枉つた人を廢める樣にすれば、人が服するも、もしや枉つたものを擧て、直な人を退く樣になれば、人が服さぬ。』

之れも人を知らねばならぬと云ふ事になるのであるが、此れがナカ〳〵六ケ敷。枉つたものは直に見へて、直なものは枉つて見へるから、其鑑定が六ケ敷のである。然し前に言

ふ孔子の研究より推して行けば、大抵間違はあるまいと思ふ。

三省

吾日に吾身を三省す。人の爲めに謀りて忠ならざる乎。朋友と交りて信ならざるか。傳へて習はざる乎。（曾子）

『吾は毎日三度自ら省みて、吾は人に對して忠實であるか什麼か、朋友と交つて信あるものか什麼か、先生より傳へられた事を實行して居るか什麼かと自問自答する。』

人間と云ふものは、自己の分らないものである。人の顏は能く見えても、己れの顏の見えぬ如く、人よりは、色々と非難されて居ても、一向に之を覺らず、到頭一生己れを知らずして送るものである。左れば毎日三度でなくとも、責めては夜寢る前か、朝起きた時に暫く靜坐默想して、其心と行とを省み、人の言ふて吳れぬ處を自ら發見して改むべきである。

人から學ぶ事と、自ら考へる事

學んで思はざれば卽ち罔く、思ふて學ばざれば卽ち殆し。（孔子）

人に二種類がある、一人は何事も自ら考へてやり、一向人に聞きもせねば相談もせぬ。一人は何事も人に聞いてばかり居て、一向自ら考へる事をせぬが、兩方とも不可ない。人から聞いてばかり居て、自身が自得する所まで考へ込まねば、やはり人智惠で己れのものとはならぬから、聞かぬも同じ事で卽ち罔い。又た一向人より聞かぬ者は自分ばかり得意がつて居て、サツぱり事情も知らずして、笑はれて居る樣な事がある。卽ち其自得は殆い殆い。

道の會員たるものは、人より教へを聞いて居るのであるが、聞くばかりではいけない、

聞いて歸つて後、更に自ら考へ、成程〳〵と自得する樣にならねば本物でない。

間違つた親切

熟か微生高を直なりと謂ふ。或人醯を乞ふ。諸を其の隣に乞ひて、之を與へきと。（孔子）

『微生高を直な人間だと謂ふものあるも、あれは直でない、或人が醯を下さいと賴んだところが、內に無いから、隣より貰ふて來て、之を與へたことがある。其樣な直は賞むるに足らぬ。』

此れはよくある形である。あの人は感心な人である、大氣であつて、よく人に物をくれる、惜氣もなく驕りもすれば、御馳走もする。又た此間は友達の貧を救ふてやつたと云ふソコで此れ丈聞けば、如何にも感心な人であるが、一體其金はどうして得たかと聞いて見

ると、其れは皆盡く借金で、之を貸した人に對しては、實に言語道斷の不義理を敢てして居る人であるとすれば、チツトも感心すべきところはない。つまり人の金を以て己れの德を賣つて居る人であるのである。然しこんな間違つた親切を施し、威張つて居る人が無いでもない、注意すべき事である。

樂しみ

衆と偕に樂しむ。（孟子）

之も孟子と惠王との問答で、或時王が結構な庭を見せて、乃公はこんな庭を眺めて樂しんで居るが、昔の賢人も如此ものを樂んだかどうかと云はれた時、孟子は之に答へて『左樣樂んだには違ひないが、樂み方が少し違ひます。昔の賢王も庭を造つたが其庭を開けつ放して自由自在に人民の縱覽を許して民と共に樂んだ、今貴王は庭を造つて唯だ一人で樂

んで御座る、夫が違ふところで御座る』と申上た。歐米へ行つて見ると、金持が大きな庭を造つて居るが、大底は縱覽を許したり、休息所や腰かけを設けて、凡ての人を歡待し、所謂る衆と共に樂んで居る。然るに日本の富豪連は、塀を回らし門を構へ『猥不可入』の看板を掲げ、近寄るものを叱り飛ばして居る、マア梁の惠王の類ぢや、唯り大倉翁が湯ケ原に居て道の會員たる資格を發揮して居る位であらふ。

何をか懼れん

自ら反みて縮からば千萬人と雖ども吾れ往かん。（孟子）

自ら顧みて疚しき所なく俯仰天地に愧ぢない身であるならば、誰が何んといはふが、かといはうが、ビクともせぬ。たとひ千萬人がわい〳〵云ふて來樣が、ちつとも懼れぬ、面と向つて進んで往くぞと、孟子は非難の中に叫んだのである。實に立派なものぢや。然し

若しも身に陰暗いところがあれば、人がこそ〳〵話をして居ても、此方がヒヤツトするものである。如何なる英雄も豪傑も、惡い事を爲て居れば、自づと勇氣も失せ、其人望が九天より九地の下に落ちるものである。夫にしても何と正義の力といふものは偉いものでないか、ソコデ惡は終に善に勝てない事が分るであらふ。

爲さざる者と能はざる者

太山を挾みて以て北海を超えんとす。人に語げて曰はく、我能はずと。是れ誠に能はざるなり。長者の爲めに枝を折る。人に語げて曰はく、我能はずと。是れ爲さゞるなり。（孟子）

『泰山を挾んで北海に超へよと云はれても、それは出來ない、卽ち能はざるものであ

る、然し長者の爲めに花の一枝を折れよと云はれて、それは出來ません。卽ち能はずと云ふのは嘘である、能はざるに非ず。爲す事を好まぬので、卽ち爲ぬのである。』

孟子の時ばかりでなく、今でも此二ツを混同して居るものが多くある。ドーモ多忙で道話を讀むことが出來ません、講演を聞きに行くことが出來ませんといふが、それは出來ませんのでない爲ないのである。飛行機や飛行船を用ゐず、其儘で空中へ上れと云ふのは、出來ないことを强るのである、然し惰けるな、嘘を吐くな、朝寢をするな、身體の爲めに調息を遣れと云ふに、ドーモ私には出來ませぬと云ふ、其れは嘘で、出來ないのでない、爲ぬのであるから言葉が違ふ、卽ち出來ませんと云ふよりか致しませんと云ふ方が本當である。然るに世には自ら爲ずして置て出來ませむと云ふものが多い、孟子の誡めたのは卽ち其處である。

浩然の氣

心を動かさゞるに道ありや、曰く有り。我れ善く吾が浩然の氣を養ふ。何をか浩然の氣と云ふ。曰く言ひ難し。其の氣たるや、至大至剛直を以て養ひて、害なければ、則ち天地の間に塞がる。（孟子）

『自分は常に浩然の氣といふものを養ふて居る、此浩然の氣が如何なるものであると云ふことは、曰く言ひ難しであるが、つまり一の精神で、此精神を義と道とに叶ふ樣用ひて居れば、如何なる事があつても、弱はることや心を動かすことはない。』

何と云つても世に正しい事ほど强いものはない、ナポレオンは如何なる剛敵や危難に會

うても、顏色を變へる樣な人でなかつたが、然し只だ人を暗殺した嫌疑を受けたときだけは、眞赤になつて辨解したといふことである。よく〳〵惰落腐敗した人でなくんば、自れの本心に責めらるゝほど苦しいものはない。俯仰天地に怍ない身なれば、何と云はれても平氣なものだ。ソクラテスが談笑しつゝ毒を呑んだのも、耶蘇が勇しく十字架の上より物言うたのも、皆此義と道とに叶ふところの精神、卽ち浩然の氣に滿て居たからである。何と議論しても、辨解しても、意地張ても、身に暗いところがあつては本當の元氣と勇氣は出ないものだ。

助けて長ずる勿れ

『或人苗が急に伸びないから、早く之を伸ばしてやりたいと思ひ、一々手を以て引き伸ばし、夕方家に歸りて、ア、今日は疲れた、一々苗を伸ばしてやつて骨が折れたと云ふから、そこで其子が走つて行つて之を見ると、苗が悉く萎れて槁んとして居た。其通

り何事も無暗に成功を急いではならぬ、草木の成長するが如く、徐々と自然に大きくなる樣勉むべきである。』（孟子）

今日道の話を聞て直ぐに君子になつたつもりになり、明日宗教談を耳にして直ぐに安心立命した心になり、一寸會ふて直ぐに其人を崇拜する氣になる樣な俄先生は、危險である。夫は暫く經つと、萎れて仕舞ふ恐れがあるからである。宗教でも、道德でも、商賣でも、事業でも、何でも、一歩々々進んで行くのである。卽ち人格の修養は一生の事業であると云ふことを忘れてはならぬ。

禍福

禍福は己れより之を求めざるはなし。（孟子）

此れは『禍福門なし、唯だ其の招くところ』とあるのと同意味である。本當に私ほど

不仕合の者は御座りませぬと訴ふ、而して其れは其通であるのである。或は人に欺かれて財産を奪はれたり、或は老て子に先だたれたり、或は病氣になつて賴るところない樣な氣の毒な人が幾等もある。吾輩とても之れに同情することを禁じ得ない。宗教家は說教するばかりが能ではない、此な不幸の人に同情して、其のお世話をすることが本分である。然し幾ら世話を爲たところで其精神が間違つて居ては駄目である。凡そ人間と云ふものは、幾等金があつても、幾ら子があつても、どれほど身體が丈夫でも、不平を云ひ、不幸を訴ふる日になれば、其れは〳〵次へ次へと色々の事が出て來るものである。故に世話するばかりでは駄目、先づ如何なる事があつても、不平を云はぬ、不足を訴へぬと云ふまでの心得を敎へてやらねばならぬ、卽ち如何なることがあつても、不幸が續いても、よく之を辛抱して、忍耐して、諦らめて居ると、人は益々氣の毒に思ふて世話して呉れるが、若しも其人に不平不足を言ふ病氣が癒らずば、幾ら世話してやつても、報恩感謝の心を起さぬから、終に世話が仕切れなくなり、其人は一生泣面に蜂の人となつて卒らねばならぬ。ソコ

で禍福は自ら求むるものであるとの意味が分つたでせう。

忠告を喜んで聞け

禹は善言を聞けば則ち拜す。（孟子）

禹と云ふ古の支那の聖人は誰れからでもよろしい、凡そ善い言を聞かせて呉れるものがあれば、則ち難有いと云つて、之に向つて拜したと云ふことである。如何でせうか、今日此樣な人が幾人ありませう、良藥は口に苦く、諫言は耳に逆ふ。貴方の襟が折れて居りますと氣を付けてやれば、則ち其親切を喜んで拜する人もありませう、然し貴方の心が少し曲つて居りますと云へば、則ち怫然色を作して怒るであらう、己れの心よりも其の着て居る衣物の方を大切に思うて居るのであるから、ウツカリとは忠告や諫言は出來ませぬ。故に修養に志す人は、我れより好んで、友達又は先生方に己れの注意すべきことを問ふべ

きである。先生何卒私の缺點を云つて下さい、私は如何樣な事を注意したらよろしいでせうか、遠慮なく敎へて下さいと問ふのである。友達でも先生でも問はれもせぬのに、貴方の缺點は什麼の、貴方の弱點は恁麼のと云はれるものではない、故に良い友達と先生を持て居て、常に其忠告や敎を聞て之を拜する心得で居らねばならぬ。若しも左もなくして、他人の忠告をも聞かず、先生の敎をも受けずして居るときは、丁度襟を折て居ても、顏に墨が付て居ても誰も告げて呉れるものが無いから、其儘好氣になつて美しい立派なつもりで、往來して居るものと同じことで、其醜態見られたものではない。

君子の過

古の君子は、過てば則ち之を改む、今の君子は、過てば則ち之に順ひ、又た從ふて之れが辭を爲る。（孟子）

君子と云ふのは、人の上に立つ者、先づ今の政治家などを指すのである。人誰か過なからん、過を改めざる、之を過と云ふと論語にもある通り、たとひ過があつても、其過であることが分つたとき、直に之を改めさへすれば宜いのである。然し其れがナカ〳〵六ケ敷ので、古の君子は其の通りにしたが、今の君子は改めないのみか、之れに順ひ其儘打捨て〻置く、否、雷に、之を打捨て〻置くのみでない、從ふて之れが辭を爲る。卽ち辭を爲ると云ふのは、辭を爲ると云ふことである。我等道に志すものは、君子でなくとも、此處をよく〳〵心得て居て、ア、惡かつたと思ふたら、其時直改むべしである。グヅ〳〵して居ると、其機を失して、ツイ其儘にして置き、終に色々と申譯を爲し、果ては其非を掩ふ樣になる、警しむべし、戒むべし。

惠と忠

人に分つに財を以てする之を惠と謂ひ、人に敎ゆるに善

を以てする、之を忠と謂ふ。（孟子）

金をやつて人を扶ける、之れは惠と云つて、誰でも其有難い事を承知して居る。然し人に善を教ゆる、之れは忠と云つて、一層前者より有難いのであるが、一向人が左様は思はぬ。否、太甚しきに至ると、恩に衣せて教を聽いてくれる不心得の者がある。『エー先生近頃はツイ道の會の講演へ御不沙汰をして居ります、相濟みません』と云ふ何たる挨拶であるか。之れは丁度金を呉れる人に會ふて、『エー近頃は一向金を貰ひに參りません、實に相濟ませんことであります』と云ふのと同じ事である。金を尊んで教を輕んずるの風、こゝに於ても見るべきである。否、金は遣へば無くなるが、教は日を經るに從ふて益々其價値を發見するもので、實は金と教とは同日の論でないのである。

大丈夫

富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はず、此れ之を大丈夫と謂ふ。（孟子）

之れは孟子中でも、有名なる句である。凡そ天下に道を行はんと欲するものは、富貴を以て誘ふても其志しを淫かすことが出來ない、貧賤させて棄つて置いても、平然として其心を動かさない、お上の威光や武力を以て嚇かしたところが、決して屈するものでない而して此れが卽ち大丈夫と謂はれるものであると、孟子は陳べた。豪相な顏して、立派な事を言つて、天下とか國家とかを論じて居ても、直ぐにコンミツションの上前を戴いたり富豪の提灯持となつたり、內閣が變ずる毎に、其言を二三にする樣な政治家もあれば、只管權門に阿諛する宗教家もある。孟子の意氣に比べて恥かしいことではないか。

道は爾くに在り

道は爾に在り、而して諸を遠に求む。事は易に在り、而して諸を難に求む。人々其親を親とし、其長を長とせば、天下平かなり。（孟子）

先生どふか私に道を聞せて下さいと云て、何だか之を分りにくい、遠方に在るもの〻如く心得て居る。孟子がどうの孔子がどうの、耶蘇がどうのと、色々と六ケ敷い理窟を聽きたがるが、其れは大間違である、道は爾に在りだ、事は易に在りだ、先づ君は親に對して奈何である、心配させて居るか、悅ばせて居るか、長者たる兄や先生や、恩人に對して奈何である、兄を兄とし、先生を先生とし、恩人を恩人として敬ふて居るか奈何か、其れを聞せてくれ。先づ實際に此等の事を行ふて居るものでなければ、其以上の事は聞かされ

ぬ。然るに世には此等の事を捨て〻置いて、教會やお寺に出入して、宗教の、道德の、修養のと騷いで居るものが多い、飛んでもない心得違ひのものだ。

孟子の人を見るの法

其の言を聽て、其眸子を觀れば、人焉んぞ庾さん哉。（孟子）

眸子と云ふのは、眼玉の事である。人と對談して居る時、此人は惡人か、善人か、將た什麼人であるかと、試驗をするには、其眼玉を見るのが一番よい。眼玉は心魂の穴であるから、心の善惡は屹と其眼玉に現はれる。此れは孟子が實地に就て驗めしたことで、間違ひがないと云ふから、諸君も其の積りで氣を着けて見給へ。吾輩はどふしたものか、此節はよく騙される。顧みれば二十歳時分より四十歳位までは、ナカ〳〵人に騙される樣な事がなかつた。然るに其後殊に五十歳を越してから、よく騙される、此れは、隨分世の辛酸

を嘗めて來たから、聊か人情と云ふことが解り、どふか少しでも人樣の爲めになりたい、人を惡く見ず善く見たいと思ふところより、騙す人に乘ぜらるゝのであるか分らないが、此孟子の言を今更の如く感じて、孟子の苦心したことに同情するのである。

教へる者の心得

人の患は好んで人の師と爲るに在り。（孟子）

人の師匠即ち先生となることは、名譽な事で結構であるが、然し無暗に好んで先生になりたがるのは患ふべきことである。吾輩は、妙な實驗談を持て居る。よく地方より上京した序に、吾輩等の家へも面會を求めて來る人々があるが、大抵は皆大天狗で、最初の中は吾輩の言を聽て居るが、中頃になると、一寸議論がゝりたことを陳べ始め、お仕舞には、滔々と吾輩を教へてかゝる。ソコで或時吾輩は其先生を執へて『時に君は吾輩に教を請ひ

たいと言つて越られたが、今になつて見ると、吾輩を教へに來て下した樣であるが如何』と、斯言つたら、先生始めて氣が着いて、ヘイと閉口して歸つて仕舞つた。ナニ其人々ばかりではない、大店の主人でも、官衙の長官でも、田舍の志士でも、毎に人の上に位して理窟を言つたり、教訓がましきことを口にして居る連中は、動もすると、此孟子の言ふところの患にかゝつて居るものである。殊に僧侶や、牧師や、傳道者と來ては、堪つたものでない。故に人は常に教ゆるより學ぶことに心を用ひて居らねばならぬ。

乞食紳士

『齊と云ふ國の人で、妻の外に妾をも置て暮して居たものがある。ところが、毎度其良人が酒や肉に飽いて歸つて來て、昨日は誰の家で飲んだ、今日は誰の御馳走で醉つたと云ひ、其交際するものが、盡く富貴の人であると聞かさるゝのに、それが一度も其の人等が自分の家に來たことがない。ソコで怪く感じて其妻が一日密かに良人の出て行く後

について行つて窺つて居ると驚いた、此良人たる先生は、成る程富貴の人の家へ行くことは、本當であるが、其人と交際するのではなく、其門に入て乞食して、飲み食ひして歸るのであつた、ソコで早速家に歸りて、此事を妾に話すと、妾も驚き、且つ互に悲んで、終に相抱いて中庭で泣いた。』（孟子）

此れは孟子の中でも有名なところである。ナニ孟子の時代や、齊人ばかりではないぞ、大正の今日でも、家へ歸れば豪相に、家内や子供に威張て聞かせて居る先生達も、外へ出れば、彼れに媚び、此れに阿り、大抵は乞食生活を爲て居るものである。千載の後、尙ほ此文には力がある。

存亡

天に從ふ者は存し、天に逆ふ者は亡ぶ。（孟子）

此れは『惡隆んなる時は天に勝ち、天定つて人に勝つ』といふのと同じ意味である。色

色惡い事をしたり、誤魔かしたり、猾い事をして金を拵らへ、地位を得、名譽を博して、意氣揚々たるものが、幾等もある。そこで一寸之を見て、道德も義理も構ふことはない、あれを見ろ、彼れでも立派にやつて居る、否、あれでなければ、今の世に成功するものでないと、人も云ひ我も許して居る先生達も尠くない。然し善く考へ觀るべし、一度コンミツション問題が起れば、金も位もあつたものでない。鐵窓に繫がれて、今更孟子の此言を思ひ出して戰慄して居るであらう。たとへ鐵窓に繫がれなくとも、今更惡い事の通らぬ事を知つたであらう。ナニ中には、初め惡い事しても後で善い事をすれば、其れでよいといふ者もあらう、又た實際惡い事を仕て居ても、其事が發覺せずに矢張り人の上に立て居るものもあらう。然し世間は盲でない、よく其人物を知つて居て、蔭では其名を呼び捨てにしたり、窃かに其尻尾を眺めて冷笑して居る。畢竟、天に從うて居るものは、必ずいつまでも安全に存るが、天に逆うて通らんとするものは、見よ必ず何日か亡びて仕舞ふに違ひない。如何に黑雲が威張つて日月を無いものにしても、到底長く續くものではない。

學問の道

學問の道他無し、其放心を求むるに在るのみ。（孟子）

學問する目的は外では無い、其間違つたる心を求めて之を道に還すことであるとの事、つまり學問をする目的は、人格を造くるといふことになるのである。勿論今日では昔の樣に人格を練る計りでも不可ない、いろ〳〵の知識をも蓄へねばならぬ。然しまた今日の樣に人格除外の教育は、國を亡ぼすものである。教育家となつても、宗教家となつても、政治家となつても、官吏となつても、學問計りで、人格の出來て居ない人達では困る。彼等は皆職人か技手で、人間としては一向に價値がない。人情は解らず、義理は分らず、無常識で不融通で、只だ理窟と規則で遣り通さうとして居るのである。今や、日本社會到るところ、此人物が充滿して居て、油の無い車が軋て居て、一向事物が運ばないから、矢張り

昔の教育に戻り、先づ第一に其放心を求むるところより始めてもらいたい。

艱難爾を玉にす

天の將に大任を是の人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞し、其の體膚を餓し、其身を空乏にす。（孟子）

此意味は斯うである。天が此人に大事業を爲させやうと思ふときは、其心を苦しめたり其體を疲らせたり、其身を貧乏にさせて、先づ之を試驗して見る。而して之に及第したものは、大に用ひて之に力を添へてくださるが、事業が少し味く行かぬと、直ぐに失望したり、人の批評にビク〳〵したり、贊成者が無いので、廢めたくなる樣な者には、何物をも託せず、之を其自滅のまゝにして置くとの事である。これは孟子の言で始めて知るべき

ことではなく、古往今來、何れの國、如何なる人でも、苟しも天下に大業を爲したる人の跡を見ば、仲々容易の事ではないことが分る。日蓮然り、保羅然り、大政治家然り、發明家然り、凡そ所謂る偉人豪傑の類は皆同じくそれである。吾人不肖なりと雖ども、裳を褰げて、其後を追うて居るものであるが、今の様な樂な事で、道會や道の會が、大發展するとは思はない、まだ〳〵苦しみ〳〵骨折り〳〵、非難も、讒謗も、迫害も、將た謀反人は内外より起つて來るに相違ないが、之に打ち勝たねば物にならぬ。尤も好んで困難を迎へるのではないが、たとへ如何なる困難が起つても、どこまでも之を貫き通すの大精神を持たねば、天が吾人を用ひて下さる譯のものでない。ソコで孟子の此言は、常に吾人に大勇猛心を與へて下さる難有い言である。

光圀公の十二ケ條

水戸光圀公は、左の十二ケ條を大書して廣間に掲げ、日々自から反省せられたとのことである。

一、苦は樂の種、樂は苦の種と知るべし。

一、主人と親とは無理なるものと思へ、下人はたらぬものと知るべし。

一、子ほど親を思ひ子なき者は身に競べ、近き手本とすべし。

一、掟におちよ、父におちよ。

一、恩を忘るゝこと勿れ。

一、慾と色と酒とは敵と知るべし。

一、朝寢すべからず、咄の長座すべからざる事。

一、小なる事に分別せよ、大なる事に驚くべからず。
一、九分は足らず、十分は溢るゝものと知るべし。
一、分別は勘忍にありと知るべし。

此の十二ヶ條の中に修養に苦心した光圀の面目が躍動して居る。

ワシントンの修身訓

一、其の衣服は通常ならんことを以て念とせよ。
一、歡待の席に於てとは云へ、人に先たちて笑ふこと勿れ、縱ひ理由ありとも、他人の不幸を嘲笑すべからず。
一、先づ敬禮し、拜聽し、而して後に答へよ。
一、歡迎さるゝや否や未定なる所へは行くべからず、忠告

は求められて後に少しくせよ。
一、大切ならぬ事件に於ては多數に贊成せよ。
一、大事に對する場合には如何なることありとも嘲笑し若しくは冷語を放つこと勿れ。
一、何人に對しても攻擊的の語を使用すること勿れ。
一、如何なることありとも食卓にては怒るべからず、殊にお客のある際には愼めよ。
一、汝の良心を養ふに努めよ。

ワシントンが北米合衆國建國の偉人なるは人の普ねく知る所、右は彼れ自から選定せし修身訓中の數節である、彼の如何なる人物なりしかは此の斷片からしても凡そは分る。

五　泰西偉人逸話

一　スポルヂョンとヅボラ書生

英國のスポルヂョンと言へば、第十九世紀大說教者の一人で米國のビーチョル、ムーデー等と相駢んで、十九世紀の偉人中に擧ぐべき人物であるが、茲に其の逸話の一を擧げて其人物の一端を窺がう。

是は書物で讀だ話しでなく、此のスポルヂョンの弟子で、現に多年築地に住んで居た、ホワイトと云ふ宣教師の實歷談で、學生に取りても、スポルヂョンに取りても、却々學ぶべき事の多き出來事である。

スポルヂョンは幼少の時より、英邁利發の性で、十七八歲より說教者となり、幼年說教者の名聲を轟かし、遂に『メトロポリタン、タバネクル』會館を建てゝ爰に從事する事三四十年、人の歸服すること子の父を慕ふが如く、其感化又た從つて偉大なるものであつた或時一英國人が戲れに米國の有名なる一旅客に語つて、現今の英國總理大臣はスポルヂョンであると言つた。其の譯は當時の總理大臣グラツドストンが非常にスポルヂョンの人物と、其の說教に感服して、殆んど之を師匠の如く、稱揚して居たからである。

處で此のスポルヂョンは教會を擔當する外に、孤兒院をも設け、慈善事業にも盡力し、兼て又た神學校をも設け、學生凡そ五六百名も養成し、英國の宗教界は、彼れ一人の爲に世界に光彩を放つて居た位、吾輩抔も、今より四五十年以前に於ては、當時每週發兌するスポルヂョンの說教集を讀み、大に之れに養はれ、窃かに在東洋の弟子を以て、彼を崇拜して居た一人であつた。

閑話休題、本題に移りて直ちにスポルヂョンと學生の間に起りたる一出來事を述べます

が、氏の建設したる神學校に於ては、校則として校内には喫煙を禁ずることになつて居りました、最も喫煙は害あつて益少く、飲まぬに越したことは御座りませぬ、然し餘り嚴しく之を戒めて、凡そ喫煙する者は罪を犯す者である、罪を犯す者はクリストの弟子たるに叶はず、クリストの弟子たるに叶はぬ者は、則ち天國に入ること能はず抔と嚴しきロヂツク筆法で、突々口を尖らかし論じられた日には堪らない、人間も左樣なつて來ると刦々窮屈で、未來どころか此世から死んで仕舞ふ、所謂る魂が固結して血の循環が惡くなりて、變屈の人となりて、薩張り世態人情と言ふ事が分らなくなり、遂に牧師となりても、傳道者となりても、仕事の出來ない狂氣染みたる變人と爲て仕舞ふから仕方がないが、然し學校に於て喫煙を禁ずるは適當なことで、校則には之を麗々と書て置くのが大切である。

スポルヂョンは勿論煙草を吸はなかつた、併し例の變屈人でなかつた故に、時々疲れた時、一休みする時抔には、煙草を吸ふことがあつた、何にシガーの一本を吸た位で、害になることもあるまいし、眞逆地獄に墮ることもあるまいから、斯ふ言ふ大人になつて來る

と、誠に自由なものである。併し學校では勿論、世間に出て始終バク〳〵遣つて居る連中とは違つて居た。そこで敢て其の事を學生に隱して僞善を極め込む樣な人物でないから、何時しか學生も夫れを知つて居りました。スルト或時『オイ時に如何だ、一服やらうぢやないか、ナニ校長も時々は遣るんだもの、一服吸た位で眞逆地獄に墮ることもあるまい』なんのと言ふ處より、ズボラ書生の十四五人が相呼び相集つて、扨て何處で飲まう、公然校内では勿論喫れず、庭園の人の見る處でやる譯にも行かず、ウンよし〳〵良い工夫があると一人が考へ出して、遙か學校の裏手の納屋の下に、石炭庫があるから、あれが好からうと云ふので、例の喫煙仲間が、ゾロ〳〵〳〵と其處に這入り込で、表は確りと戸を閉し、内より鍵を掛け、暗い處で、思ふ存分に煙草を吸つて居りました、ホワイト氏も其の内の一人であつたそうだ。

スルト校長スポルヂョンです、唯何事も知らず、例の如くぶらりと遣つて來ると、何だか煙草の香ひがする……夫はそうでせう、幾ら戸を閉め、鍵を掛た處が、煙草の煙は防げ

ない、內で十四五人も喫るんであるから……、ソコでスポルヂョンもハテナ誰れか煙草を吸ふものがある、何處であらうと嗅ぎ廻したが、心付いたのは例の石炭庫、ハアー扨こそ横着の學生共、這う言ふ處に籠城して、窃かに煙草を吸つて居るな、捨て置く譯に行かぬと思ひましたから、ソツと其の戸口に立寄り、內でがや〳〵咄しをして居るのを聞き濟し靜かにトントントンと其の戸にノツク致しました。

內の學生は夢中になつて煙草を吸つて居る最中に、トントンと戸を叩くものがあるから矢張り横着連中かと考へて、一人の者が誰れだと詰れば、一向返事がない、ソスト又暫らくしてトントントンと以前よりは少しく强く叩く音が致しますから、又一人が『誰れだ名乘れ、然れば開けてやらう』と申しますと、戸の外に立つたる一人が、唯だスポルヂョンだと答へた、併し學生共は眞逆にスポルヂョンが遣つて來たとは思はない、誰れか一學生が惡戲に嚇かして居るのだと思ひましたから『馬鹿を言へ、ソンなに嚇かすものでない、欲煙ければ入れて遣る、正直に貴樣の名前を言へよ』と申しますと、今度は慥かにスポル

ヂョンの聲と思しく、イヤ己れは眞にスポルヂョンであると言つた。

學生は愕きましたナ、サア皆な話を止めて仕舞つて眞靑になつて仕舞ひました、實に大變です、之れが本當表向きになれば、輕くて大お目玉、重ければ退校、それのみならず、喫煙で退校となる日には、親に對し、友人に對して、面目ないのみならず、宗教界に在て大に擯斥せらるゝ譯でありますから、其の眞靑になつたのも無理ではなかつた。

處が爰に度胸の据つた、頓才の利いた、一人の學生がありました、此の者が其と見るや突々と戸の口に來りて、今しも戸を叩くスポルヂョンに向つて、故意と途惚けた聲を放つて『オイオイオイ之さ嚇かしちア行けねヘよ、御前が餘り甘くスポルヂョンの假聲を使ふによつて、皆んなが本當に騙されて縮み上つて仕舞つたよ、一體本當に誰れだい、左樣言ふことをすると、其の分では捨て置かぬぞ、今に寄つて集つて苛い目に逢はして遣るから左樣思へ』と申しました。

此の時スポルヂョンが默つて歸つて仕舞へば非常な失敗も無つたのであるが、然れば迚

校則を破つた學生に一本遣られて歸るも異なもの、殊に今の一人が餘り平氣な聲にて、御前はスポルヂョンではあるまい、誰れだ誰れだと、申しますから、ハアー之れは本當に己れではないと思つて居るなと、スポルヂョンも考へましたから、又も聲を張り揚げて、今度は能く分る樣に一層高く『吾はスポルヂョン此の學校の校長である、他人の眞似をして居るのでない』と申しまするとと、例の一人が之を聞くと直ちに大聲を揚げて、カラカラと打ち笑ひ『ハヽ御前はスポルヂョンの聲を眞似る事は上手だが、其の腹を眞似る事が出來ないと見へる、一體吾が尊師スポルヂョンと言ふ先生は、此んな處を嗅ぎ歩く樣なソンな卑劣な先生ではない、度量海の如く、識見天の如く、寛厳宜しきに從ひ、時と處とをチャンと辨へて御座る人物である、(日本語でいふならば)ソンな重箱の隅をせゝくる樣な先生ではないぞ』と一喝スポルヂョンに喰はせました。

如何にも左樣でムります、一校を治めて行く事は却々手加減のある者で、知つて知らぬ振をすべき時もあり、知るや直ちに嚴罰を下すべき場合もある、其の事と時と場合とが考

へ物で、此の場合の如きは學生等が窃かに隱れて庫の中に縮み込んでやつて居るのであるから、先づ大目に見て置た方が良いのであるのぢや。そこでスポルヂョンも始めて其處に氣が付きましたものと見へて、其の儘悄然と歸つて仕舞つたと言ふ事です。

如何です、彼の一學生の頓才と勇膽も豪いものだが、默つて歸つたスポルヂョンの奥床しい處は又一段豪い者でありませんか、平凡の校長なら、赫と爰に怒り出して、益す戸を叩き遂には之れを叩き壞しても、此等反則の學生を捕へて、吾が校長の威信に關するなんと言つて、必ず之を放逐するに相違ないのぢや、今や我國諸方の中學校、師範學校抔に、多くの學校騒動の起ることであるが、其等の學校の校長は此の話を聽いて置く事が藥でせう。

ホワイト氏の話に、其の後ホワイト氏がスポルヂョンに逢はれた時、スポルヂョンはホワイト氏の肩を叩いて、あの時御前も居たであらう、アノ己れを遣り込めた何某は、今に見ろ、必ず群を拔くに相違ない、其の智其の膽、あれが傳道者には必要であるぞと、却つ

て彼の學生を稱揚して居られたさうだが、果して今日其人は倫敦に於て有名なる說教者になつて居る、此處等が卽ちスポルヂョンのスポルヂョンたる處でせう、今の磊々たる教育家は、ちと此の話より學ぶべき處あつて可なりです。

最もスポルヂョンが戸を叩いて戒めたのも滿更無益なことではありませなんだ、何となれば最早學生は其處で喫煙することを止めたからである、又スポルヂョンが默つて引込んで行き、其の後恰かも忘れたるかの如く、何とも再び其の事に付て話さぬのを見て、學生等は益すスポルヂョンの德に感じたと言ふことですが、總て師弟の間柄は斯くありたいものであります。

2　ロバート・バーンス

ロバート、バーンスは蘇格蘭の農民の子で、家至つて貧しく、幼少の時代より、彼方に

傭はれ此方に賴まれ、日雇農夫と爲つて生活したものである。

午併、非常な學才があつて、學問が好きで、恰度アブラハム、リンコルンの樣に、農夫の小僧に雇はれて居ながら、暇があれば人に就て字を學び、本を敎はり、其の漸やく長ずるに及んでは、只管ら詩を好み、詩集を集め、草車を押しながら、常に詩集を手より離さずこれを讀みつゝ歩いたと云ふ程である。

然るにバーンスを去ること五百年程以前に、ラングランドと言ふ詩人があつた、此の詩人は矢張り農夫で貧乏で暮して居たが、時の政府が苛稅を搾りて農民を虐めるのと、饑饉が起りて農民が餓死するのとを眺めて、堪らなくなり、遂に鋤を投じて起て詩人となり、變な俗謠を作り、至極農民に同情を寄せ、暗に時の政府を罵り、之れを民間に流布して子傳にも歌はしめ、農夫の小价にも謠はしめ、終ひには漸々と革命的の精神を鼓吹して、所謂る農民の大反謀を起させたものであるが、バーンスは此の歌を得て大いに喜んだ、而して同じくラングランドに倣ふて、至極俚俗的の詩歌を作り、之れを人民に讀ませんことを

企てた、彼れラングランドの『鋤の人』と言ふのは有名なもので、其の歌の一節を擧ぐれば斯うである。

我れ農民の哀れな心を思ひながら通りかゝりて不圖見れば、夫婦の農夫が田を鋤いて居る、流石豪農の落魄にや、今猶依然として帽を冠れども、其の帽は破れて蓬頭が其の口より出で、身には衣を絡ひ居れども、澁紙と古着を以て綴り結んだるもの一枚のみ、其の履は指を吐き、其の形は瘠せ衰へ其の顏は憂ひに老ひ、其の眼は涙含み、實に見るに忍びざる程の姿である、而して其の後より鋤を押して行く妻の樣を見れば、跣足にて血は滴々と其の足より出で、踏み行く跡に血痕を印し、西より東に、又東より西に鋤いて行く、ア、之れ悲慘の極にあらずや。先方を見れば田畝の此方に畚に入れて置いてある二人の小兒が、飢と寒さとを忍びかね、二人の親の來らぬのを見て、聲を限りに泣て居る然れ共此等可憐なる夫婦は此れを顧みる遑なく、漸やく鋤き戻り來りて、其の側に近寄り暫時鋤を止めて大息したが、軈がて其子をヂツト眺めて『兒供よ靜かに兒供よ靜かに』

と、憐れな聲して叱りながら、又も彼方へ鋤いて行きけり。

バーンスは五百歳の下之を讀んで、其の變はらざる古今の狀態に萬斛の涙を流しました而して願はくは我れ亦たラングランドの後を襲はんものと決心しました。

乍併、流離顚沛の身の上、如何も到る處思はしくないより、當時西印度に善き仕事のあるのを聽き、どうせ碌々如斯處に愚圖々々して居た處が金も溜らず、學問も出來ぬから、一層の事、西印度に出稼ぎして、金をも儲け、從つて時をも得て、玆に我が詩人たる志を遂ぐるの土臺を作らんものをと、殆んど西印度を指して出稼人の船に乘り込み、今や將に出立せんと致しました。

然る處が此に一人の助くる人が顯はれた、バーンスは時々其の作つたものを其處等の人に示して居た、すると或人が此れを見て『之れは面白し、却々の天才である、若しも此者をして充分に其の天才を發達せしむれば、吃度有數の詩人に爲るに相違ない』と、見込みを着けて、早速バーンスを尋ねて行き、御前は西印度へ出稼などするには及ばぬ、我れが此

れから助けてやるから、之れよりウンと勉強して天晴れの詩人と爲れよと勵まして呉れました。

實にバーンスに取りては、此れが一大攝理であつた、即ち彼が運命の開ける始めであつた、乍併讀者諸君よ攝理とか、幸運とかのみを思ひ給ふ勿れ、從令ひ幸運や攝理があつてもバーンスに夫れ丈の天才なく、人の目に着く程の實力が微りせば、其の幸運攝理に出會ふ事の出來ぬもので御座りますから。

其處でバーンスは『愉快な乞食』と云ふ詩を作りました、此れは乞食に由りて天下を罵倒したもので、孟子が所謂る『出でゝは卽ち祭墻に行きながら入つては卽ち妻妾に驕る』と謂ふのと同じ意味で、實に今日は紳士の乞食が多い、彼方に媚び此方に諂ひ、世間に向つては大威張りに威張つて居るも、實は殘殺餘瀝を貰つて、得々其の意を得たりとして居るのみである、此れは我が別莊である、彼れは我が新宅であると誇つて居るが、其の實は身を售り節を賣つた報酬物であるのである、卽ち彼等は僞善者的乞食である、夫れよりは

如何だい、眞面目の乞食の方が僞善者でない丈け其れ丈け勝つて居ると云ふ樣な意氣込で大氣焰を吐いたのである、そして此の詩を著してより名聲が頓かに揚つて來た。

バーンスの時代には、リチアードの樣な壓制なる王は無かつた、饑饉も無かつた、黑死病も流行しなかつた、其處でランダンドの如く、時の農民を勵して謀反心を起させる樣な必要は無つた、乍併宇內の交通爰に開けて、貿易次第に發達し、從つて貧富の懸隔も著しく、金ある者は王侯の如く、金なき者は乞食の如く、從つて正直なる農民が苦みて、橫着なる盜賊に類したる金持が時を得顏に橫行すると云ふ樣になつて來たから、バーンスは如何にも憤慨で堪らなかつた。

其處でバーンスは大いに天爵を稱へて、人爵を賤め、畢竟り人の貴賤高下は、人の位官にあらず、其財產にあらず、衣服にあらず、家にあらず、其の人の神魂卽ち性格に在りと云ふ事を大いに下民の間に鼓吹した。

扨して其の語調は卑しと雖も能く人々に分り、其の節は高からずと雖も、能く衆人の腹

に落ち、時々は時の俗間に流行したる人情的の歌をも之れに交へて、至極平易に綴つたものであるから、誰人も之を解し、誰人も之を誦し、誰人も領き、誰人も讀んで奮激する樣な歌と爲つて表はれ出た。

前にも申す通りバーンスは農民の子で、而して至極賤しき被雇人であつた、乍併、カーライルの云ふ如く、其の腸はダンテの腸で、其の聲はミラボーの聲で、其の舌はボルテールの舌であつた、彼れは田草野花にまで同情を寄せ、囀づる雀にも啣く虫にさへ、友人の如き感想を泛べて、之を咏じたるほど優しき人であつた、乍併、其の心魂は實に大英雄大豪傑の心魂であつた。

顧みれば恰度今より四十七八年前に、我輩は初めてトマス、カーライルの英雄崇拜論を讀んだのであるが、トマス、カーライルが英雄崇拜論に此のバーンスを評して『不撓不屈の大精神とは實にバーンスの如きを云ふのである、彼れは幼少の時より不幸なる運命と鬪つて來た、而かも一度も落膽失望することなく、恰かも大獅子が其の鬣に降りかゝる露を

拂ふて進むが如く、彼れは荊棘の間を横行した、蓋し大英雄とは幾ら重荷を負ふも、益々進み行く大丈夫漢を謂ふのである』と言つてある處を讀んで、恰度自身も不幸な境遊に沈み、益々累なる重荷を負ふて行きつゝあつたものであつたから、此の一句の爲め、非常に感奮し、大いに勇氣を得たるを覺へて居るが、實にバーンスは野菊の如く優しき涙含みたる人であると同時に、又た大獅子の如き大英雄であつた。

今時日本の詩人や文學者たるものを見るに、其の愛とか戀とか、花鳥とか風月とか云ふて、發句や和歌に憐れなる情若くば腹の無き洒落を吐いて居るもの〻多い樣ぢやが、優美ばかりで、英雄的神魂と人道的憤慨を缺いて居るのは、返す〳〵も遺憾である。凡そ詩人歌客と云へば、單に優しきもの〻樣に思ふもの多くあれど、總じて歐米に在て名を爲せる者は左樣ではなく、悉く皆な此のバーンスの如く噴火山的の神魂を備へて居たものに多い彼れウオーヅウオースの樣な聖人の如き人も、又一方には英雄的方面を具へて居た、然らば則ち如何せば此の英雄的神魂を具へ得べきかと云ふに、今の樣な發句や和歌や新體詩抔

を行つて居つて、益々其の心が女性化する斗りで、大丈夫化する氣遣ひがないから、何でも大詩人大文人と爲らんと欲するものは、先づ其の以前に、バーンスの如き傳記を讀み、深く世を憂へ、國を思ひ、眞に至誠人を動かす底の修養を爲し來らねばならぬと思ふ。

斯くてバーンスは右の大精神を率ひて人民の歌を作り、天爵を鼓吹し、人爵を卑しめ、時の盜賊的貴顯や富豪を罵つて、來るべき十九世紀の社會問題に大影響を被らしむるべき傑作を出しつゝあつたが、遂に三十八歳を一期として貧困の間に心臟病より不眠症と爲つて死んで仕舞ひました、實に惜むべき人物である。乍併僅か三十八歳ではあつたが、決して短き生涯とは言へない、基督は僅か三年間傳道したのであるが、今日は全世界を動して居る、其の如く、此後起り來たる十九世紀間の、平民的の詩人、文學者、小說家などは、皆な其の源泉を此のバーンスより引いて來て居るのである、而して見ると、源泉は小なるが如しと雖も、其流るゝ末は非常に浩大なるものとなつた、彼れバイロンは三十六歳で死んだのである、然かも自由を鼓吹したる力は又洪大なるものであつた。又た十九世紀の預

言者ロベルトソンは三十七歳で死んだのである、乍併、彼が當時懷疑の淵より跳り出でゝ九天の上に動き、種々の宗派を打破して大道を茲に開闢したる大業は、皆な等しくバーンスと共に稱すべき者である、此の故に我輩は右バーンス、バイロン、ロベルトソンを稱して近代の三大豫言者と云ふのである、青年なる我國の宗教、詩人、文人、諸君等は、孰れも此の三大豫言者を師表として進むべきである、左樣なれば我國今日の社會に大いに貢獻する處がありませう、卽ち丁度今日は我國に此の三傑を要求する時であるから。

3　サムエル・ジョンソンとミルトン

サムエル、ジョンソンは十八世紀中、英國第一流の文學者、我が日本の青年の中にも殆んど知らぬものはない程である、トマス、カーライルの大氣に入りの人物で、其の英雄崇拜論を見ると徹頭徹尾賞めちぎつてある。

成程ジョンソンは氣骨ある人物、獨立心强き丈夫漢、心胸快濶なる好男子であつて、實にカーライルが賞むるに價して居る人品に相違ないが、又其の裏面には如何にも情なき憐れなる、又意氣地なき談話が幾らも有るのである、由つて之れより撮んで、其の概略を擧げて見よう。

ジョンソンは牛津大學の學生であつた、併し却々の貧書生で寒天にさへ往々靴を穿かず偶々穿いて居るのを見れば穢い破れた指頭の出て居る樣なもので、そして時としては其の指頭より輝の爲めに血を出して居る事が度々あつた。开で金持の學生で彼れの友人なる或者が、氣の毒に思ひ、一箇の靴を買つて來て、ジョンソンに與へて之を穿かしめんとすると、ジョンソンは大に喜ぶかと思ひの外、大立腹して『此れは失敬極まる、君は我輩を乞丐と思ふか、男子世に立つ、苟くも人の慈善を受けぬが本意である、我れは縱令ひ我が足が凍へて千斷るゝとも、又た慈悲的の靴を穿たず』と謂つて、無情く此れを突き返した、开で友人は變な姿だと一時憤として、よしよし其れならば勝手にせよと言つて、其の靴を

取つて歸らうと爲たが、元來人に物を惠まうと云ふ樣な優しい性の人であるから更に又思ひ返して、イヤ〳〵ジョンソンは斯如性質だから仕方がない、何しろ風變りの人だから、此方も又た腹を立てゝ喧嘩した處が詰らない、一層默つて此の儘ジョンソンの部屋の隅に置いて歸つてやらうぞ、彼れ迚も又た思ひ返して、我が此の好意を諒得し、何時しか此の靴を穿く氣になるかも知れないと、斯う思つたから、別に敢て爭はず『マア〳〵左樣一概に立腹せんで居て呉れ給へ、敢て君を乞丐視したと云ふ譯でもなく、唯だ夫れ友人の間柄、惡い心で爲たのでないから』と、又御慈悲で遣つたと云ふ譯でもなく、程能く挨拶をして其の儘靴を置いて歸つて仕舞つた、するとジョンソンは噴々言ひながら、其處を立つて何處かへ行つて仕舞つたが、程なく歸り來りて、其の靴が矢張り已れの部屋に置いてあるのを見るや、默つて何とも言はずに、汚い物に觸る樣に、指尖で之を摘んで、學窓の下に迚來り、其の儘之れを門の外に捨てゝ仕舞つた。

如何ですか、チト奇激には過ぐれども、其の氣概の盛んにして、獨立心に强きは驚くべ

きではありませんか、何でも人より無暗に乞丐したがる者に碌なものはない、人より物を貰ふ事が癖に爲つて、彼方へ行つては帽子を貰ひ、此方に來ては靴を貰ひ、此處では二十錢借り、彼方では三十錢借り、平常に借りたり貰ふたりすることが癖に爲つて來ると、兎角獨立獨歩の人には爲り難い、其れ故に成るべく貰はぬ樣、借りぬ樣、己のが足で己が歩み、己か手で己が働き、綿入れが衣られぬ時は袷で濟し、袷が衣られぬ時は單衣で濟し、下駄が穿けぬ時は草履、草履が穿けぬ時は跣足でも好し、己れは自ら生きて居るのである他人の厄介には爲らぬと云ふ、此の了簡が、獨立の基礎、勉强心の動機、立身の門出、出世の源泉である。此の心無き者は我輩の言を待つ迄もなく、よく御覽、一生涯、人の厄介か世の厄介に爲つて消光す者に相違ないから。ジョンソンの樣に人の好意を無にして迄、獨立心を主張するはチト變に過ぎ激に過ぎて善くない事ではあるけれど、己のが腹の据り處は卽ち此處でなければならぬ。

右の談話は有名なもので、既に諸君は知つて居られやうがジョンソンの青年時代を傳す

るときになれば、則ち之れを落してはならないのである、そして最一ツ此處に面白き物語りがある。

彼の『ラセラス』と云ふ一卷の小說は、諸君の知る通り、今では日本の諸學校に敎へて居るから、今更ら紹介するに及ばぬが、ジョンソンが此の『ラセラス』を書く時は誠に氣の毒なる境遇に居つたのである、卽ちジョンソンは例の獨立獨歩主義で、媚びず諂はず、耿介俗を拔いて歩つて來たから、金錢には淡白であつた代りに、何時も貧乏して暮して居た。すると其の時に母親が死んだ、何にジョソソン位の人物で、已に當時に名の知れて居たものであるから、借金すれば出來ない事はないのであつた、乍併、例の性質故之を好まず、然ればとて今現に母親が死んで居るのに之を葬る貯蓄へがないから、是非共何とか算段をせねばならぬ、於此乎、晝も夜も打ち掛り、一晝夜か二晝夜の間に此の小說を書き終り、直ちに之れを書店に持つて行き、之を售つて漸やく母の葬式を濟ませたと言ふ事である、人生の慘事蓋し之れに過ぐるものなしと思はるゝ程である。乍併、ジョンソンはかゝ

る惨事に會ふも更に屈せず、矢張り其の獨立心を貫いて行つた。

我輩は勝海舟先生が、其の父親の死なれた時、是れを葬るの資財を得ず、止むなく人を

も賴ます、何んでも親類の人と己れとタツタ二人で、其の棺を擔いで墓所に行かれたと言

ふ事を聽き、海舟先生が鍛錬の工夫は、誠に其の青年時代より重り來つて居るのを見て、

何時もジョンソンが當時の事に聯想し、我が身も又大いに勵ました事があるのである、實

に事肉親の上に及んでは、殊に山海の恩を享けたる父母の事に及んでは、殆んど魂摧け

腸裂ける思ひのする者である。然るを夫れすら忍んで其の獨立心を貫き行つたと云ふ事

に就いては、實に同情極つて涙迸出するを覺へぬ程である。

乍併、諸君よ諸君よ、茲にジョンソンにはその身の上に就て更に一層上の慘事の出來事

が起つて來たのである。

ションソンは其の後益々有名に爲つて來たから、隨分書物を書き論文を書きなどして、

餘程收入を得たのである、乍併かゝる人物の癖として其の金錢に淡白なるのは宜いけれど

も、出入其の度を計らず財政が不節制に爲つて、金を貸せと云ふものあれば何時でも貸し

憐れな者あれば何時でも惠んでやり、左ればと言つて隨分怠ける事もあるに依つて始終大

貧乏で暮して居た。

开で友人の勸めに任せて此に一大字典を編纂することを企てた。之れは實にジョンソン

が一生の大事業で、此の字書を編纂した曉には、却々莫大の報酬が取れたのである、依つ

てジョンソンも之に打ち掛つて、實に非常なる立派なる殆んど空前の大字書が出來たが、

其内に一の逸話がある、それはジョンソンが彼の pensioner（政府より功勞として賞祿を

貰ふ人の意）を註して『此れは政府の奴隷である』と書いた事である、以て當時如何にジ

ョンソンが窮困するも猶且つ pensioner を賤めて居つた狀態を見ることが出來る。

然る處がジョンソンは益す困窮に陷つて來た、夫れはジョンソンが收入を得る事の六ケ

敷かつたのではなく、其の財政を顧みず不始末不節制にして、有る金は遣つて仕舞ひ、吳

れて仕舞ひ、而して金のあつた時は奢り散らかし且つ惰けるより、借金する積りは元より

無かつたが、何時しか諸方に不義理を掛けて薩つ張り首の廻らなく爲つて來た事である。

今日世上を見るに隨分如斯人が澤山在る、其の人物を尋ぬれば、醇良潔白で、學力も又之れに協ひ、仲々何處迄も立身出世して行べき運命を佩びて居るものであるが、其の餘りに醇良なるより無下に人の憐れを見捨て兼ね、初めは己のが金を貸してやり吳れてやり、遂には他人の借金を負ふてやり、保證人にもなつてやり、己れは人を惠んだ積りなるも、遂には其人の爲めに大迷惑を被り、入るものに限りありて出づるものに限りなければ、果ては人を助くる能はざるのみか、己れ先づ人に助けられざるを得ない場合に陷ゐり、唯だ其の急場を免るゝ爲めに一時高利貸の如きものに憑りて、其の責を防ぎ居ると、終には荷に荷を累ね、重きに重きを加へて、進退維れ谷まるものが尠ない事ではない、そしてジョンソンも到頭其の部類の人と爲つて仕舞つた。

此れは實に注意すべき事で、如何に豪傑と言ひ聖人と言ふも、第一身の度を知らねばならぬ。聖人とても豪傑とても、食ふものは喰はねばならぬ、着る物は衣ねばならぬ、眞逆

パプテスマの約翰の如く、曠野で蜜を喰つて消光して行く譯には行かぬから、夫れ相應の覺悟を爲さねばならぬのである。然らば其の衣食住を何れにか得べき、先祖代々よりの遺産があれば兎も角も、さも無き時は、己が額に汗して働かねばならぬ、己れが額に汗して働かねばならぬとなれば、却々骨の折た事で、入るものを圖りて出づるものを辨ぜざれば忽ち飢餓に瀕するのは勿論の事である、然るを之れを此れ構はずして、甘いものを食ひ、美しいものを衣、立派な家に住つて前後左右を省みず、豪放磊落に遣つて居れば、一時其の心地は善いかなれども忽ち土崩瓦解の時機到來するは覿面である、於此乎一時獨立心を主張し潔癖を貫いて居るものも、遂には止むなく借金する樣に爲り、借金すれば不義理を掛くる樣になり、不義理を掛けて償ふ事能はざれば、終ひには自暴に爲つて、頽波滔々又防ぐべからざるに到るものである。

然ればジョンソンも其の青年時代に當つては、好意の靴をも退けて受けず、中年に及んでは pensioner を解釋して政府の奴隷と罵つた程の硬骨漢であつたが、遂には、自ら其の

pensioner の一人と爲つて年金三百磅を貰ふ奴隷界に墮落して仕舞つた。

ジョンソンは啻に pensioner に爲つたのみならず、其後は以前と打つて代つて、時の王ジョーヂ三世を稱め囃し、ジョーヂ王が亞米利加殖民地に加へたる苛稅の暴政をも辯護して〝Taxation no Tyrany〟『加稅は暴政にあらず』と云ふ論文を草する迄に墮落した、すると或る友人が之を笑ふて『ジョンソン餘り甚いではないか』と冷評した處がジョンソンは答へて『ナニ仕方が無い哩、今の處では三百磅の天秤の向ふへ廻る物が無いから、且つ貰ふた以上は、何か爲てやらなければ義理が濟むまい』と言つたと言ふ事である。

此の言を以て察すれば、流石に快活なジョンソン故、眞面目であつたとは思はれない、併し何しろ金轡を欽められて、以前罵つて居たものを今度は賞め、僅か三百磅の爲めに、其の硬骨を賣つて仕舞つたとは、實に惜むべき情けない始末ではないか。

青年諸君よ、能く心して此のジョンソン傳を讀み給へ、ジョンソンは其の死ぬる時に大息して、我れは地獄に陷ちまいかと心配したとの事であるが、死んでから後の事は知らぬ

が、實にジョンソンは一度び獨立の節操を售りたる以來は、人から下蔑られ笑はれ、多年の名望を一時に失して、已に地獄に陷ちて居つた、今や我國にも如斯人が無いではない、警すべく又戒むべきではなからうか、是れと言ふも無暗に前後を辨へず己れ應分の生活に安んじ、唯だ夫れ獨立を寶とする事を打ち忘れて不圖も詰らぬ虛榮に誘はれ、畢に節を賣らねばならぬ事となつたのであるから、青年の意氣盛んなる時は兎も角も已に三十四十に至れば、茲が一番危ふき處である、妄りに名譽を取り生活を豐かにし、而して退いて守る事を知らず、遂に甞て自ら罵つたる奴隷生活に陷ちぬ樣注意せねばなりませぬ、或人の詩に曰く『唯名與利多爲累、一過此關纔丈夫』と、能々苦心の上の一句と見へる。

扨で此れは別の談であるが、ミルトンの事である、即ち其處に至るとミルトンは豪かつた、ミルトンはジョンソンと正反對で、富豪の子であつたから、榮耀榮華に其身を送り、當時有名なる清教徒の教師を家に雇ひ置いて勉强した位、扨して劍橋大學校に居る時の如きは實に立派なる衣裳を着けて居た故、其れが爲めに衆人に目立つて見へ、其れに美男子

であるから、或る大家の令嬢が戀慕して、一日彼れが或る樹下にトロ〳〵と午睡して居る時に、立派なる花を其の膝に置いて去つたと言ふ程の粋な談しのある男子である。

如斯してミルトンはジョンソンとは異ひ美男子で富裕で麗しき衣裳を着けて女の心を動かしたと云ふ樣な人である、又其の中年の頃を顧みれば則ちコロンウエルと共に劍を提げて起ち、天下大洪水の源を茲に開き、古今未曾有の大革命を演じ、多年の間雷に英國のみならず、時の宇内を震撼せしめたほどの大丈夫である。

處がコロンウエル死し、再び王政に恢復して查祿斯二世の代と爲るや、彼れは見る〳〵大反動の波濤に打たれて、渺々たる世界に漂ひ、王よりは非常なる慘酷な目に逢ひ、幾度か危機に陷つた揚げ句、家は益々貧しく身は漸やく老ひ、其の妻をも養ふ事能はざるに至つたが人心反覆の淺ましさ、世上誰れとてミルトンを構ふものなく、殆んど餓死に瀕せんとした時が屢々あつた。

於此乎、查祿斯二世は這は心地快し面白し、如何なるミルトンの剛情者も今では礪と弱

つたであらう、一ツには己れの大なる度量を示さんが爲め、二ツにはミルトンが意思の强弱を試さんが爲めに、爰に人を遣して斯う謂はしめた、曰く『ミルトン汝の罪は大なるべし、然も此れ勢の然らしむる所、今に至つて敢て尤むるの要を見ず、縱令ひ其の處置に於ては許すべからざるものありとは言へ、其の誠意誠心に於ては朕れ深く汝を氣の毒に思ふ之れに依て、自今若干の年俸を與へて爾が餘命を安泰に送らせんと思ふが如何にや』と、ミルトンの妻は大いに悅んだ、夫れは最早パンを買ふ金もなく、衣物を購ふ餘力もなく、債鬼門に迫り兒女内に泣くと云ふ有樣であつたから、扨でミルトンに憑めて以前は以前今日は今日と諦め、其の年俸を受けさせんとした處が、ミルトンは此の時憤然として襟を端し、愁然として涙を催して斯う言ふた『嗚呼御身はミルトンの妻ではなく、矢張俗人俗物破廉恥漢の妻であるか、御身は斯く迄に我が苦勞する所以を得察し給はぬか、御身も矢張り普通の女の如く馬車に駕つて歩み度望み給ふか』と、そして斷腸の思ひを爲したとは云へ、尙ほも巍々乎として其の膝を屈せず、斷然查祿斯の申込を却けた。

嗚呼男子の腸を斷つと言ふのは此の處でありますぞ、一身の得喪榮辱は之れを思ひ切るに難い事はない、併し其の妻が憂へ、子が泣き、家族が我身の貧乏の爲めに悲慘なる境遇に淪んで居るのを見るのは、實に堪へたものでない、今時虚榮に驅られ無理算段を爲して外貌を張つて居る人を見るに、夫れは一身で虚威張りに威張りたきが故に依るのも多くあれども、其の連中は却つて少なく、大抵は親類の手前、妻の手前、子の手前など考へ、心ならずも生活を高め門戸を張り、而して借金の揚句、遂には其の身を賣物に出すに至るのが目の邊りに多いのである、千軍萬馬の間を往來して矢石の間に其の身を入るゝのは却つて易いが、此の人情的の戰爭に勝つのは實に六ケ敷ものである、然るにミルトンは此れにさへも打ち勝つた、开して失樂園(パラダイス・ロスト)を草して、之れを賣つても僅かに十八磅より賣ること能はず、加ふるに其身は盲目に爲つて、晩年の悲慘實に名狀すべからずであつたが、到頭其の義魂を貫きおほせた、之れをジョンソンに比して見れば、實に正反對で、ジョンソンを聽いては啻に憐れを催す斗りであるが、ミルトンを聽いては頑夫をして廉に、懦夫をして

起たしむるの概あらしむ。

我輩はサムエル、ジョムソンの事を記して、遂にミルトンに及んだが、常に此の二人を見て誠めつゝある者であるから、不知不識爰に及んだ、併し男兒世に在る短きは四十五十長きも七十八十に過ぎず、苟くも此の間に立つて歴史の人たらんと欲するものは、其の臭を千歳に曝し、社會風教上に悪例を遺して、永刦志士の物笑ひ、義人の爪彈きに逢はない樣に志ざし、常にミルトンを標準として我身を勵まし、永く世の鑑たらんことを志ざゝねばならぬ事と考へます。

4　ビスマークとヂスレリーとの大衝突

孰れも、曠世の癖物、十九世紀第一の怪物が、此處に大衝突を來したる面白き談柄がある。

御承知の如くビスマークは、外交談判にも個人と個人との應對にも、何でも最初に一喝人を呑んで掛ると言ふのが彼れの六韜三略で、例之ば三角同盟の時、彼は先づ墺太利を說いて同意させ、續いて伊太利にも乘り込み、之をも同盟に加へんと言ふ計畫で時の日耳曼皇帝ウイルヘルム第一世を伴つて、伊太利の都ローマに赴きし事のありましたが、此の時汽笛一聲に連れてズツト汽車がステーションに着きますと、伊太利の陸軍中將何某と言ふ人物が軈て迎ひに出まして態々ビスマークとウイルヘルムとを御迎ひ申上げんと、忝しく、プラツトフオムを歩み來り、今や自ら手を下して汽車の戸口を披かんとする途端、ビスマークは豫て企み居たことゝ見へ、室内の窓よりソツト首を出して彼れ中將の來るを認め、時刻を計りて戸口の側に立て居りしが、恰度中將が這入んとする機みの時、此方より、ドツと戸を開いて、彼の巨大なる體軀を持て突き出ましたから堪らない、中將は不意を打たれてプラツトフオムの上に仰向様に顚倒りました、實に苛い奴であります、これ則ち一喝を喰はせた處で、然し彼は又却々如才のない愛嬌を振り蒔く場合も少からぬことであつて

彼が大望を企て、第一に墺太利を凹ませ、次に佛蘭西を破り、そして普魯西亞王を日耳曼皇帝に登せんと欲して居たる當時にあつては、却て諸方に愛嬌を振り蒔いたもので、墺太利の政治家も彼れの謀叛を知るに由なく、拿破崙三世も全く其掌中に籠絡せられてビスマークは實に談相手になる吾が友人である抔言つて居つた位、然れば此の拿破崙三世が戰ひ敗れ勢ひ散じて遂に降參の悲運に逢ひ其の佩劍を脫して之をビスマークの手に渡さんとしたる時、ビスマークは之を氣の毒がりて『帝よ吾れ帝の國に公使たりし時を思へば、吾れ之を受け取ること能はず。縱令ひ運拙く軍敗れたりと雖も、帝は尙ほ吾が眼中には依然たる帝たらざるを得ず、されば他人の前にはいざ知らず、此のビスマークの前には、帝が脫劍を承認する能はず』と言つて、其の儘手を執り、叮嚀に之を誘ふて、吾が軍營に伴ひたりと言ふことである。殊に露西亞に公使たりし時の如きは、却々如才なく立廻り、交際社會で持てたもので、アンナ獅子の樣な面をして居ても、却々滑稽抔も言ふことのあるさうで、予の先輩三好退藏君の如きも態々馬車にて迎へられ、同じ卓子で食事を致されたと

云ふことですが、却々叮嚀で愛嬌があつて優しい處が見へたさうだ。尤も獅子が調戯る樣で、薄氣味惡く感じたと言つて居られたが、露西亞に公使たりし時抔は、無暗に爪を匿して、其の大望を感付かれぬ樣に、氣を付け、萬一墺佛兵を構へた時には、露西亞が干渉せぬ樣に巧く立ち廻つて置いたさうである。

ソコでドーンと突き衝つて殴されたものであるから、伊太利の中將は、非常に立腹して之は怪しからぬ、何者である無禮者めと大音聲を揚げて立ち上りまするとビスマークは實に周章てた眞似して、『之は之は御無禮失敬、何とも恐れ入りました』と言つて、後ろに廻りて着いたる砂を拂ふやら、前に廻りてペコ〳〵頭を下げるやら、實に大愛嬌を振り蒔いたさうです、然しながら中將は尙ほも立腹已みませぬ故、どう致しましてとも何とも言はずに尙ほ々々『汝は何者か』と怒鳴つて居りますと、私はビスマークである、誠に何とも申譯ないと小さな聲で言ふたので、中將も初めて氣が付て見ると、如何にもビスマークであるから、其の愛嬌に欺され正眞に疎忽であつたらふと考へて、其の儘、夫は濟で仕

舞つたが併し打ち倒されて漸やく失敬位で濟んだと言ふのは、最早一喝で參つたのであるソコで愈よ本文に戻つて之からビスマークとヂスレリーのお話、何方が勝つか敗るか。

時は千八百七十八年、處は日耳曼の首府伯林である。此の時露西亞と土耳其の戰爭にて、英吉利が土耳其の肩を持ち、ヂスレリーが大威嚇を施して露西亞を脅かし付け、普魯西亞は以前の關係あるより先づ露西亞へ同情的中立を取り、佛蘭西と墺太利は何れも中に介りて餘り露西亞に同情を持たぬが、先づ干渉をしないと云ふ態度であつた。然るに露西亞に於てはゴルチヤコフと云ふ首相が采配を把り、イグナチーフと言ふ癖物が各國の間に策を弄すると言ふ時分、何しろ豪傑揃ひの時代であつた。

然るに此の露土戰爭の事は、暫らく省いて措て、扨て普魯西亞が首唱者となつて、爰に愈よ平和條約が出來ると言ふ場合になり、各國の全權公使が、各々普魯西亞の都伯林に入り込んで參りましたが、露國よりは例のゴルチヤコフ一代の雄物、普魯西亞はビスマーク英國よりは乃ち時の宰相ビーコンスフィルド侯卽ちヂスレリー、並に時の宰相サリスベリ

ー、之はヂスレリーの弟子の様な者で、併し矢張り全權公使の一人として之に出張致しました。會議の席での大議論は、ビスマークが調停の勞を取り、英露則ちゴルチヤコフとヂスレリー、とが嚙合つたのだつたが、所謂る龍虎相鬪ひて山岳爲めに震動すると言ふの狀態、凄まじいとも何んもと言ひやうのない有樣で、ゴルチヤコフが然らば最早や之れ迄なりとて、地圖を捲き、席を蹴立て去らんとするやら、ヂスレリーが然らば宜し、予も又此の上讓り難しと怒鳴りて、忽ち臨時列車を命じて歸國せんとするやらイヤハヤ實に大騒動であつたさうで御座ります。

然し本文は會議の開かれんとする直ぐ前の時であつて、此の議會と言ふのは、普魯西亞が主人であるから、ビスマークが議長に爲り、場所は伯林なるビスマークの邸宅で開かれたのであつたが座敷の周圍にはゴルチヤコフ、サリスベリー、墺のアンドラシー、佛のワヂントンを始め、何れも六大强國の全權大使續いて土耳古、希臘、羅馬尼、モンテニグロ等の小國も皆な其の全權を派遣したから、何れも堂々と控へて居りました。然し一向ビス

マークが出て來ない、因て議長先生如何したものかと、皆々不審つて待つて居りますと、一寸と隅の戸を半分開いて、面をニューッと差出して、座敷の樣子を見んが爲か、ギヨロギヨロ眼で眤と見廻して居る者があります、夫は左樣としても、失禮なことには、此の者帽子を冠つて居ります、すると直ぐに其の傍らの椅子に腰かけて居たのが、例のビーコンスフイルド侯則ちヂスレリーでありました、之を見ると忽ち其の椅子より立ち上つて、今迄脫いで居た帽子を取るや否や、之を逸早く頭に被り、更にニューッと其の面を出したるものと相睨んで、其の戸口に直立致しました、其の頓智と言ひ剛膽と言ひ、實に豪い奴ではありませんか、今夫れ面を出したる者は誰れですか、言はずと知れた、時の大癖物、ビスマークでありました、彼は前申上げる如く爰にも又一喝を滿堂の豪傑共に喰はせんと心得て、態とビスマーク慣用の眉庇付の帽子を被つて、一つ荒膽を取らんと試みたのであつた、併しながらヂスレリーも去るもの、却々伊太利の中將抔とは人物が違つて居るから堪らない、之は失禮とも何とも言はずに默つて帽子を冠つて立つたのが面白い、ビスマーク

が帽子を冠る權利があるなら、吾も又帽子を冠る權利がある、ビスマークが立つて見廻す權利があるなら、吾も又立つて見廻す權利がある、之を口で爭つたり、怒つて咎めたり抔すれば、則ち物事が大きくなつて野ぼだから、何共言はずに、平然帽を冠つて起つた處が乃ち味のある處で、ビスマークが眞向より振り翳して、切り付けた處をアイヤ心得たりと軍配を揚げて受止めたる處恰かも川中島の合戰を見る樣である。

然れば此の時ビスマークは如何致しましたか、實にビスマークは不意を喰つて驚いた、然も流石の癖物、直ちに眼を怒らして、ヂスレリーの面を見詰めながら『吾れは當席の議長である』と大音聲で怒鳴りますと、ヂスレリーは又た平氣な顏して、然かも確然たる聲を放つて『吾は又英國の大宰相である』と答へたと言ひます、何と面白い豪壯なる話ではありませんか、諸君には如何でありますか、之れを禪宗坊主にでも聽かしてやつたら、手を拍ち喉を鳴して、ヤア、ヂスレリーは慥かに禪學の奧義に達して居たと申しませう、其のビスマークに相對せず、獨語の樣に『吾れは英國の大宰相である』と言つた處が面白い

ではありませんか、之にはビスマークも一言の議論をも交へ得ず、其の儘悄然として引込で仕舞ひ、直ちに其の友に語りて、今度來て居るヂスレリーと云ふ奴は、却々容易ならぬ人物であるとの一言を漏らし、會議の時に、益々ヂスレリーの智略膽勇を認めて、彼が英國の大宰相である間は、英國は決して他國の侮辱に逢ふことなかるべしと斷言したりと申します。思ふにビスマークの閉口したのは一世一代の中、只此のヂスレリー許でありませう。

尙一言申し加へたいのは、此の頓才であります、外交官には尤も之が要り用で、斯う言ふ處で、一寸敵の荒膽を取るのは肝要なのである。西鄕隆盛はア、言ふ君子的の人であつたが、爰に外交上一頓才を振つたと言ふ話がある。當時佛蘭西公使が何かと言ふと英吉利公使と相談した後に返答すべしと言つて、兎角外人が聯合でやつて來るので、隆盛先生も爰に一策を案出して、或る日、途惚た顏して佛國公使に向ひ、私は一向無學で分らぬが佛蘭西は英吉利の屬國ですかと尋ぬると、佛國公使は眞赤に爲つて立腹して、之は怪

しからん、佛國は堂々たる獨立國であると、孰國くと、西郷は又平氣な顔して、ア、左様でしたか、之は失禮、私は貴公が何時も英吉利公使に尋ねてから、事を爲さると云ふから、大方屬國ででもあるのかと思ひましたと云ふと、佛國公使は初めて一本やられたと氣が付きて、以來は獨斷の應待を爲し、英國公使と聯合してやつて來るのを止めたと申します、餘り斯う言ふ事計りに着眼するのは宜敷ないが、然し心膽が出來た以上は、自づと斯う言ふ頓才が發するものでもあり、又必要なのである。

5 アブラハム、リンコルン

リンコルンに付ては、吾輩一書を著はした事もあり、論文を書いた事も、演說をした事もあるにより、之より、十九世紀の偉人數名を並べて、之を論評しやうとするに當り、リンコルンは止め様かと思つたが、實を言へば、十九世紀の偉人の中で、吾輩はリンコルン

程好きな人はないのである。

十九世紀の偉人の中で、誰れが一番、豪いかと、よく、尋ぬる人があるが、夫れは中々六つかしい、時と場合と、心術と、事業と、成功と失敗とを、よく〳〵研究して、判斷せねばならぬ故、一寸優ひ、偉くないは、言ひ難いが、何しろ、吾輩が、一番好きなのは、此のリンコルンだ、家康と太閤とは、どちらが、豪いか、大いか、一寸判斷が六つかしい或は、家康の方が、豪くもあり、大きくもあるだらう、併し吾輩は秀吉の方が好きなのである、ワシントンとリンコルンとはどちらが豪いか劣くないか、勿論評論家の輿論で見ると、人としては、ワシントン程、圓滿に發達して居る者はないのである、吾輩迚もワシントンの前には感嘆斜めならず、却々リンコルンなどの企て及ぶ處でないと思ふ、併し、ワシントンより、リンコルンの方が好きである、其の理由は我身自らも判らぬが、多分、身の境遇も、天禀の性質も、事業の希望も、幾分かリンコルンに似て居る處が多いからであらう。勿論リンコルンに及ばないのは知れて居るが、其處で、どうも、リンコルンを拔き

にする事が出來ぬ。

アブラハム、リンコルンは、十九世紀の曉卽ち千八百九年の春に生れたのである、家は百姓、大貧乏、已に八歲の時には、親父と共に山の奧へ芝刈りに出て、日本で言へば畠の草を抽いたり、其處あたりの耕作の手傳をして居たのである。

父さんは、只だ朴訥な、剛毅な、正直な、愉快な、田夫漢であつたが、其の母は非常に才華のある、怜悧な、而かも物の哀れに感じ易き、宗敎心の厚き、善きクリスチヤンであつた。夫故に、リンコルンの性質を見ると、此兩親の性質が、チヤーンと其の內に、調和してあつて、リンコルンには、朴訥なる處も、よく滑稽を語る愉快な處も、一度志を決して起つ時には、山嶽を摧いても通ると言ふ、剛毅な處も、優しい哀れな處、卽ち、子供の時に、蟋蟀の足を一本折つて、其の跛を曳いて、歩くのを見て、可哀さうになり、一時間許りも、此を眺めて、泣いて居たと言ふ極々しほらしい處もあつたのである。

リンコルンが第一に志を立てたと言ふのは、隣の父老さんに當時流行のワシントンの

話を聽いたからである、ワシントンが櫻樹を斫つた時、其親に大層叱られるとは、思つたけれども、嘘を吐くのは、尙ほ惡いと考へて意を決して、正直に其の樹を斫りましたと、白狀した處などを聞いて、リンコルンは、確かに大いに感じたものである。又ワシントンが十八九歲の時に、子供の川に陷るのを見て、直ちに衣を脫いで之れに投じ、拔手を切つて激流を涉り、とう〳〵瀧壺に陷いりて已に生命の危ふかりしにも拘らず、身を捨て其の子供を助け上げ、之を其の子の母親に屆けました時、其親が涙ながらワシントンの手を捉へて『オー青年よ、神は必ず大任を後日御身に授け給ふべし』と、祝福の語を放つて大にワシントンに感謝したりと言ふ、これらの談柄を聞いても、非常に其の心を動かしたものに相違ムいません、彼が後日奴隸解放の爲に力を竭し、遂に之が爲に暗殺せられても猶ほ悔いなかつたと言ふ、其の魂、如何なる貧窮に出會つても、一度も嘘を吐かなかつたと言ふ、此の二つは、慥かにワシントンより貰つて來たものと思はれます。

人を學ぶのに種々の法がある、今時の人は兎角に形體を學んで、其の心を學ばない、夫

故に豪傑肌の人を崇拜すると、自然と己れも亦た豪傑氣取りになり、溫厚の君子を慕ふ時には、故と溫良恭謙讓の體裁を裝ふと言ふ、此れは猿眞似で役に立たぬ。何でも神樣の造つた隨意に其の性質を曲げぬがよし、生れ付き磊落な者は夫でよし、生れ付き謹厚なる者は又夫れでよし、何でも人眞似せぬがよい、併し其の心術に至つては何れも大人豪傑を學ばなければなりませぬ。ワシントンは聖人的の人、リンコルンは磊落な肌、其の氣質から言へば、サツパリ似た處がないのである、併し其心から言へば、異人同體で、少しも異る處あるを見ない。然ればリンコルンも其の心を學んで、其の形を學ばなかつたと見へ、彼は一生涯面白き人で暮し、ワシントンは一生涯、謹み深い人で暮しました、先づ一寸青年諸君の學ぶべき處はこゝらでムりませう。

今時の青年は兎角に勞働を厭ふて困る、夫は已れ獨立でやつて居る學生は、其の者の權利であるから、先づ暫らく容赦して置くとするも、苟くもリンコルンのやうに貧窮の間に志を立てゝ事を爲さんと欲する者は、勞働を厭ふ樣では、迚も身を立る事が出來ないの

である、誰れとても學資もあり他に方法もあれば、勞働することは厭に極つて居る、夫は俗人俗物に、子僧よ丁稚よ書生よ玄關番よと罵られて、ボイ捲られるのは餘りいゝ心地のする者ではない、然し仕方がないぢアないか、飯が食へぬのだもの、實は吾輩等もやつて來たからよく知つて居るが、時には半宵月を睨んで涙潸然たることもあつたのである。併しいくら不平を言つても、境遇が境遇だから仕方がない、矢張りヂツト辛棒して其の約束の職分丈は、チヤント極りよく義務を守りて、忠實に力めねばなりませぬ、勿論其の主人に不義理をせぬ以上、双方熟議の上ならば、始終其の仕事を變へ、主人を變へ、境遇を變へ、少しにても都合のいゝ處、修業の出來易い處、發達の望みある處へ、廻り廻つて行くがよい、何時迄も詰らぬ所に糞辛棒して居る事は得策でない、遂に一生を誤るに至る。併し、其の雇はれて居る以上は、十分其の場其の場の職務を忠實に盡さなければならぬ、丁稚になれば丁稚、門番になれば門番、其の場其の場に應じて吾れ其の者になつて居るのが肝要である、リンコルンを見給へ、彼は種々の境遇を經由したが、到る所全力を盡して

其の職務に忠實であつた。然れば到る處、賞められ可愛がられ、感服せられ、そして追々長者の爲に見込れて、出世の蔓を見出しました、爰ですぞ、今日の貧青年が大にリンコルンに學ぶべき所は。

到底り損はゆかぬ、己れは天下の豪傑なんのと威張つて、到る所に懶けて居ると、遂には誰れも相手にしてくれず、身も又雇壯士に陷ゐるに極つて居るが、リンコルンの樣に、兀々兀々忠實に辛棒强くやつて居るときには、人々より憐れみを受くる樣になつて、自然と援ける人も出來、時間も出來、却つて早く出世の出來る樣になるものである。第一勞働をして居ると、身體が壯健になり、頭がよくなる、故にリンコルンの如きは、終日耕作をして歸つても、夜になると勉强をして居つた。尤も一寸爰が六かしいのですが、勞働ばかりして了つては仕方がないから、矢張り閑を求めて勉强せねばならぬが、所謂ソロ〳〵急げといふのは爰で、絶へず根强くやるのである、昔の諺にも、一日一字學べば一年には三百六十字だ、遲い樣だが早いもので、其中には、終日働くに及ばず、心次第で、幾らも

勉强の折を見出すことの出來るものである、リンコルンは二十四五歳の時には、一と簾の書物は讀んで居つた。

扨てリンコルンは苦學して二十二三に爲つた頃には大分書物も讀める樣になつたが、愈愈一生の目的を定めねばならぬことになつて來た、そこで何を爲すべきか、農も行つて來た、商も行つて來た、渡船場の小僧にもなつて、一隻の端艇を借り受け獨立の生活をも試みて來たが、元來志はサウ言ふ處にあるのでない、卽ちワシントンを學んで居るのであるから、其の志は刦々洪大な者であつた、そこで先づ國家的の人物に爲らねばならぬが、夫に就ての捷徑は先づ法律を學ぶにありと考へました。

かくて、リンコルンは法律で身を立て樣と考へた、然し矢張り金もない、時もない、ソコデ仕方がないから、田舍で己れの住ひ居る近傍の豪農らしきものを廻り始めました『ハイ今日は御宅には私を傭ふて呉れませぬか』と賴めば、リンコルンは身の丈六尺五六寸筋骨逞しき人物であるから、直ちに承知して呉れました、然しリンコルンには目的がある

以前ならば只勞働の間に何くれとなく、書物を讀みさへすれば、其れでよいのであつたが今は一寸獨學の出來ない專門學を行るのであるから、更に語を繼で『然し私は志あつて此の近邊の法律學校に通學したいので御座りますが、其の時間丈けは私の所有として御許に預りたいが如何なものでありませうか』といふと、サア薩張り傭ふて呉れるものがありませんでした。

學生的傭人は實に困つたもので、どうも仕事に身が入らぬ故に、大抵の者は斷ります、然る處世には又特志な人もあるもので、爰に一豪農でアームストロングと言ふ情け深い人が、リンコルンの正直らしい顏を見て、委細承知と、受合ふて呉れました、併しリンコルンは傍ら學問を志すと言ふが爲に、決して其の勞働を疎かに致しませんでした、約束の時間丈は他の勞働人よりは一層忠實に働きました、ソコで主人アームストロングも感服して、遂にリンコルンに申渡して『吾れ汝の志を嘉し且つ汝の忠實心に酬いんが爲め自今以後は更に勞働を爲すに及ばず、吾家を汝の家と思ひ、吾が身を汝の父と思へ、吾も又汝

を子の如く思ふ』と言ふので、之れよりリンコルンをして專心一意學問に從事致させましたが、之れ實にリンコルンが出世の角石でムりました、どうです、矢張り正直な忠實な堅志あるものは、必ず何時しか引き立るものが出てくるのであります。

ソコでリンコルンは、學校を卒業して、辯護士を始めた、處が例の快活な面白き人物で、正直な質で憐みの深い國家的大望のある人物であるから、人の敬愛を惹かねばならぬ事と爲つて、評判甚だ宜敷、續々と辯護の依頼者がありました。

リンコルンの優れたる處を言へば、第一彼は非常な常識の人でありました、之は貧乏の御蔭で、苦勞の結果で、どうも苦勞せぬ人は、人情が分らぬ、同情が少いと言ふて態と貧乏することも要らぬが、兎角辛いも甘いも嘗めて來た人間になると、人の話が早解りするもので、そして之が辯護士には、至極必要であるのであるから、リンコルンは此の點に於て確かに大成功を致しました。そして一つは彼の議論の仕方であつた、彼は一事件を研究するに、之を前後左右兩端より叩き盡して、悉く議論のある所を己れ先づ呑み込んで後

卽ち法廷に出ました、故に第一に敵の議論のありさうな所を悉く己れが先づ前に述べ置いて、而して後に一々之が反論を試みたと言ふ故に、敵は己れの言はんとする處を先づリンコルンに言はれて仕舞つて、今更辯ずれば敵の陷穽に陷る樣になり、大いに閉口したといふことです。

次にリンコルンは無法なる報酬を取らず、世の難澁なる者には自ら求めて、無報酬の辯護を引受け、實に幾人も無告の民を救ふてやりました。爰に於てリンコルンの義俠心は衆の認むる所と爲りて、開業後間もなく、則ち二十四五歲の時には已にイリノヰ洲會の議員に選ばれ、そして直ちに政治界に接觸する樣に爲つて參りました。

リンコルンの義俠心に就て爰に面白き話しがある、當時或る雜誌に、有名なる時の將軍シールドと言ふ人に就て少しく愚弄がましき文章が出でました、するとシールドは眞赤になつて、其の雜誌の編輯長に掛け合ひ、何者の所業なるか之を白狀せよと言ふから、編輯長は困りました、實は或る婦人の投書であつたが、其の實名を告る事が出來ない、大層弱

つて居りますと、其處へリンコルンがやつて參りました、互に朋友の事であるから、何を心配して居ると言ひ、實は云々の譯なりとて話を聽かすと、兼て俠骨に富たるリンコルンは、然らば拙者が之を引受べし、一體シールドは平生傲慢無禮の曲物、相手に取て面白し然らば其の投書はリンコルンが書いたと言へ、何の恐るゝ事のあるべきやと言ふ、編輯長も如何なる椿事の出來ずるやも測り難しと心配して、兎角の返事を躊躇する間に、例のシールドが身自ら其の處へやつて參りました。そこでリンコルンが直接に、彼れは拙者の投書なりと言へば、シールドは怒るまい事か非常に立腹して、青二才の辯護人よくも生意氣なことをと言ふ權幕で、直ちに決鬪を申し込み其の場所も時間も定めました。然しリンコルンは平氣なもので、驚くかと思ふたら驚かない。委細合點承知と受合つて、當日はシールドより以前に現場に赴き、約束通りの大斧を振り上げ、シールドの來た時には呵々と打ち笑つて、ヤア君は軍人に似合ぬ臆氣を取つて逃て仕舞つたと思つたに、よくこそ御出になつた、サア之れからやりませうと滑稽交りに彼に向つたと申します。尤も此の決鬪は際

どい所で双方知人が駈け付けて、仲裁する處とは爲つたが、何しろリンコルンは愉快な男でもあつたが、又剛膽の丈夫ででもあつた。聞く處によればリンコルンは後日人に語りて我決闘を爲したのは一生の汚點で、今更思へば面目ないと云つて、始終決闘如き野蠻の行爲を戒めて居たそふです。然し人間は其の位の俠骨と勇氣がなくてはなるまい、人には好かれる性と、嫌はれる性とがある、所謂る乙に氣取る灰殼連は兎角壯士に打たるゝ性、心易く見せ掛け、同志の如く調子を合せて、而かも秘密を語らぬ徒輩は、大抵天下に親友のなきもの。國家社會とか、世道人心とか、口にも陳べ筆にも書きたて、非常に熱誠に働く樣だが、而かも己れの名譽利得のみ、即ち己が店計りの繁昌を心掛くるものは、遂に其の乾兒に見捨てらるゝ運命に逢ふものである。

然るにアブラハム・リンコルンの如きは、如何しても人から憎まれぬ性である、何時も申す通り『正直アブ』と言ふ渾名を取つた位、至極澹泊な正直な腹の赤い有りの隨意の性であつたから、人の彼れを惡み樣がなかつた。彼れは或時端艇を渡して、思はず一弗の銀

貨を得、其の嬉しさの餘り夫を三度も四度も、天に揚げては之を掌に受け、掌に受けては之れを天に揚げ、人の見る目も打ち忘れて、非常に嬉しがつたと言ふ、斯う言ふ性は人から憎まるゝ者でない、夫かと言ふて唯だ正直計りでは人より馬鹿にせらるゝ恐れあるが、人の難儀を見ては生命を抛げ出してゞも、決闘を爲さんと言ふ俠骨と勇氣とがあつたから仲々人から馬鹿にせらるゝ恐れなんどはあることなく、却つて此れが爲め、人から愛せられもし、又た畏れられもする樣になつて居た。又た其の眞面目な處を言ふ時には、南北戰爭の續く間は、朝夕神の前に出で、慟哭して戰場の悲慘を訴へ、去ればとて正義の爲めに今更ら止むべきにあらねば、速かに正が勝ち邪が挫け、天下大平に到らんことを、心底より獨り密室に籠つて、禱つて居たと言ふ位であるし、又た其の快活な質より云へば、リンコルンは前々申上ぐる通り、幼少の時より、イソップ物語を好み、已れも又能く滑稽話を巧みにし、子供を集めては、御伽噺を聽かせたから、リンコルンの至る所には、子供が手に縋り足に纏ふて『伯父さん御噺し御話し』と付けつ纏ひつしたと申しますが、之れ亦

た何れも惡まれぬ質を顯はして居る。

然ば辯護士の業は能く流行り、イリノイの州議員に擧げられても評判益す宜敷く未だ卅歳にならぬ內に、衆望全く彼に歸し、彼は未來の大統領たるべしと嶺かに人々の噂する樣になつて居りました。

然る處茲にリンコルンの大敵が表はれました、其の名はドグラス、此の者は却々の雄辯家で、論理家で、學問は元よりリンコルンに優り、金を蒔き、徒黨を作り、仲々容易ならざる勢力を揮つて居りました、そして其の勢力の偉大なりし事は、後日リンコルンに對して、同じく大統領候補者に擧げられたのを見ても知れる位、先づ英國で言へばグラッドストーンとヂスレリーと言ふ樣な鹽梅であつた。

故にリンコルンの政治生涯を擧ぐれば、其の大統領に擧げらるゝ迄の間は、先づ此のドグラスとの戰鬪記みた樣なものになる、永らくの間イリノイ州の議會に於て之と戰ひ大統領候補者になつてからは、愈々之と奮鬪するやうになつたからである。

リンコルンは共和黨より擧げられ、所謂奴隷廢止の主義、ドグラスは合衆黨より擧げられ、而して所謂る奴隷維持を主張したるもの、然し之は啻にリンコルンとドグラスの議論ではなく、米國合衆國全體二分の議論で、夫は實に十九世紀中大爭亂の大議論であつたのである。英國に於ては、ウリバルフオースが之を叫けび、國會は殆んど狂瀾怒號の有樣、米國に於ては又たガリソンが叫びストーが愬へて、社會を擧げて之が爲に動搖すると云ふ場合、リンコルンは夙に華盛頓の心を以て心と爲し、ワシントンが昔者暴君の壓制を破りたるが如く、吾れも亦た今回は富傲者の壓虐を碎かねばならぬと言ふの神魂、因て已に此時には死を決して起つたのであつた。

今と爲りては實に不思議な樣ではあるが、人の慾目と言ふ者は曲者で、當時聖人君子と言はれた人でも、此の奴隷廢止の議論には贊成する者が鮮かつた。又た基督敎の會堂に於ても牧師が聖書を引いて聖書には奴隷が許してある故に今更之れを廢するに及ばずなんのと云つて說いたものであつた。又或者は理窟を付けて『今や奴隷廢止を唱ふる者は合衆國

の北部に多いが、是れは南部の人民が奴隷を使ふて、綿の耕作に利益を得るを口惜しがり嫉妬紛れにかゝる議論を唱ふるのである』と言ふのであつた、彼の有名なる十九世紀の大說教者ヘンリー、ワルド・ビーチョルが當時英國へ出掛て行つて、此の奴隷廢止の大議論を吐き、之れが爲めに南北戰爭を惹き起すも正義の爲め又已むを得ざるなりと、絕叫して諸所に大演說會を開きし時に、グラツドストーン如き人道家ですらも一向冷淡に之を評し亞米利加は馬鹿な事を仕出かした、南方も又之れアングロサキソンの血を有するもの、到底分裂より外はあるまいと言つた位であつた。然しながら凡そ震天動地の大事業を企てるものは、只だ夫れ事の正きを見て難きを見ず、此の故に往々溫厚の君子よりは批難されるものでムります。

リンコルンは此時に當つて、摧起して出で來つた。多年蓄積し來れるヒューマニチー心、蟋蟀の脛を折てすら、哀れを催して泣たと云ふ其心を奴隷に向けて出で來つた、而して其の議論は至極單純なるものであつた、唯だ『合衆國獨立布告の明文に依る』と言ふ一點張り

のみであつた。種々複雜なる議論に入ると、屢々ドグラスには喋舌り捲られた、然しリンコルンは何時も言ふた、夫れ獨立の布告文には『人類の平等』と言ふ事が書いてあるが、亞弗利加の黑奴は人類の中でないのか、牛や馬と同じものであるのか、唯だ此の一つに說明を與へよと、斉で此大議論にはドクラスも始終閉口したそふである。尤も當時黑奴には人間の魂が無いと言ふ說も隨分流行つた、彼れには人情と云ふ者がない、其の子を愛したり、親を慕ふたりするのは矢張り、牛馬が其の子を愛したり、其の親を慕ふたりするのと同じ事で、所謂る本能性の働きのみであると言ふやうな慘酷い議論で、今となりては黑奴の內よりドグラスと言ふ有名な男も、ワシントンと言ふ豪い人物も出て來た、先年米國組合教會の大會で、第一等の雄辯を揮つたと言ふ亞弗利加土人の傳道師も出て來た事故、左樣な馬鹿議論は遠く夢の如く去つて仕舞つたが、當時は却々左樣言ふ反對論も勢力があつたのであつた。

然しドグラスは負て仕舞つて、矢張りリンコルンが撰ばれた、而してリンコルンが撰ば

れるや否や、合衆國は北と南に二分して、直ちに四年の大戰爭を惹き起し、双方にて死したる數が百萬人、此の間にリーと言ふ南方の豪傑、グラントと言ふ北方の英雄抔が顯はれ出で、亞米利加の天地に千軍萬馬の塵を揚げた事であるが、遂に正義の勝ちとなり、グラツドストンの豫言も薩張り當らず、奴隷維持に贊成した聖人君子も、今や顧みて恥る樣になり、基督教會も今更既往を忘れたるかの如く、相擧つて奴隷解放は吾黨主張の勝利を表はしたものであるなんのと威張つて居るが、其の實リンコルンの鐵骨が挫けざりしに依ることが多いのであつた。

戰爭半ばにして北方の連中も屢々考へ直さうとした、意氣は壯んなるも、何分戰爭に慣れぬ中學校や大學校の書生等が、何千何萬と言つて討死するのであるし、寡婦は寒と叫び孤兒は飢と泣き、家は燔け、田園は荒れ、所謂兄弟妻子離散して、其の屍を戰場に曝すと言ふ慘狀、而し之が一年二年ならば未だしも、南北共に互角の勢を示して、所謂る鬪牛の角突合で、何時果つべしと云ふ目當も付かず、遂には南北相俱に潰滅に歸すると言ふ惧

のあることゆゑ、政治家は元より軍人迄も最早や大抵なら和睦して事を姑息に結ばんと申し出たる者も多かつた。然しリンコルンは斷乎として之を聽かなかつた『今や之を姑息にして措けば、後來南北間に葛藤絶へず、到底り災禍の根を爰に伏藏して置くもの故、後世子孫に申し譯なし、既に錨を揚て大海に押し出したり、到着すべき處迄到着せずんば如何せ此の船は沈沒なり』と神色自若として動かなかつた、是れ即ち平生は諧謔を云つて居ても、眞逆の時には山嶽を碎いても通らふと云ふ、リンコルンが鐵骨のある處である。

リンコルンは幾度も暗殺に逢ひかゝつた、併し之が他人であつたなら、本當に疾くに殺されて居たでもあらふ、然し根が、人に嫌はれない質であるから、敵人なる南方の方でもリンコルンを知つて居るものは、其人物の上に於ては何れもリンコルンに感服して居たものであるから、毎度其暗殺を免かれた。此處が即ち人に惡まれない質の德のある所で、顧みれば維新の時を經て、勝伯の長壽したのも、其秘訣は矢張り斯う言ふ處にあつたのであらう、此の間、維新風雲錄を讀む內に、夫の長州征伐第二の役に、勝伯が單身孤行で、廣

島迄乘り込み、幕府の命を御んで、說諭兼和議體の談判を始めた時、時の井上馨、當時の聞多先生が、勝の旅館に尋ね行いて『オイ之れ勝呆けるなよ、貴樣は隱して居るが、已等は疾に知つて居るよ、將軍は大坂城で死んだらう、知らぬ顏での平和談判、其の手は喰はぬぞ、之れ勝如何ぢや』と詰り問へば勝は又平氣な顏して『さうかも知れない』と言つたと云ふことが書いてあつたが、斯う言ふ連中になると、惡み樣もない、リンコルンも（其の横着と正直なのとは違つて居たが）先づまア左樣言ふ質の人であつた。

そこで到頭遣り透して四年の戰爭も終り、南方が大敗して、將軍リーも降り、敵の統領デビスも逃げ、其の本營たるリッチモンドも陷いり、北方大萬歲になつた時、リンコルンは六七歲なる季子の手を曳いて、今や漸やく陷りて敵氣紛々たる最中をも顧みず、兵隊は固より一個の從者をも伴はず、飄然此のリッチモンドに入り込んで來て、而してリーをも免し、デビスをも免るし、凡て今日迄敵對したる官吏將官等をも悉く免し、其後平然諸方をも徘徊して、黑奴の集ひ來りて彼に跪拜するのを眺めて、涙を浮べながら又元の道

に歸りたりと申しますが、何と奧床しい大人の風姿では御座りませぬか。

併し乍らリンコルンは遂に暗殺されました、狂氣染みたる俳優ブースの爲にやられました、彼は素より其の覺悟で居りました、其の戰爭終りて第二の大統領に擧げらるゝ時、驚嚇しの手紙は山の如く參りました、此の暗殺の前日も其の企てのあることを知らせ呉れた人がありました、併しリンコルンは毎に斯う申して居りました『ア、吾れは已に一大事業を爲し遂げた、吾れは此の爲めに生き此の爲に死すべし、此れで終始あるものとなる、吾れが第二の大統領に擧げられず、靜かに閑地に就くならば、是れ寔に安全の策なり、併し今にして退くは恰かも峻坂に馬車馬を取り換るが如し、吾れは麓まで到着せざるを得ず、吾が事業は尙ほ少し剩れり、思ふに吾れが麓に到着する時には、吾が一生の事業は終るべし、北方は遂に勝てり、故に恨む處あるべからず、南方は財を糜し、生命を賭し、奴僕を奪はれて、而して遂に敗北に終れり、吾れは此れが爲めに彼等の腹癒となりて死せざるを得ざるべし、吾れ若し暗殺せらるれば、双方の塡合之にて付くべし、吾れは今にして退く

べからず、事の終りを結ばざるべからず云々』と其の已に覺悟を定めて居たことは、之れにて充分解ります、其の剛膽にして而かも潔然たる處は、實に十九世紀偉人の劈頭第一に掲げて恥づかしくない人物でムります、今の日本に在る翩々たる小才細策利己の徒は、最早や論ずるまでもなきことであるが、苟くも青年にして志を立つると言ふ人物は深く此のリンコルンの幼時より、其の立志青年の時代を通じて國家的人物に成つて、國と人との爲めに竭して死んだ處を大いに學ばねばなりますまい、今の日本は師表に乏し、思ふにリンコルン等を師表として行けば、二十世紀の日本には隨分大且つ高なる人物が出るに相違ありませぬ。

6　グラント將軍の初陣

人は我慢が肝腎です、ナポレオンも申しました『何んでも戰鬪は五分間の辛抱で勝てる』

と戰鬪計ではない、百事皆其通りで、此方が苦しいと思へば、彼方も苦しいのだ、我慢較べ辛棒角で、勝負は分るものである。

此處に北米合衆國の大偉人グラントと云へば、鬼將軍と唱へて、南北戰爭四年の間に、一度も負けたことの無いと云ふ豪の者、此點より云へばナポレオンより優い先生ぢや、然し其自叙傳を繙て見れば彼れも矢張り人間であつて鬼ではなかつた。

グラントが始めて戰場に出たとき、一大隊を率ゐて居たが恐怖て〳〵堪らない、然し孰れも皆初陣の事ゆえ、戰慄て居るもあり、顏色の靑くなつて居るのもあるから、大將が戰慄へてはならないと、大我慢をして力んで行きますと、先方からも一隊の敵兵がやつて來ました、之を見ると其狀態の勇ましさ、所謂る旌旗は空に飜へり、銃劍は太陽に閃き、正正堂々と押し寄せ來たる勢ひに、一目慄然とするほど恐怖心が起りました、然し男子一旦死を決して出掛けた以上は、固より退く譯には參りませんから、度胸定めて、此方もドシドシと向つて參りますと、最早や互に程近くなりました、然しながら相手方からも未だ發

砲しません、承はりますに、臆病なるものは見當も定めず、無暗矢鱈に、遠方から鐵砲を擊つものだそうですが、兵法に從へば、成るべく接近してから、一齊に礮と擊つのが本當であるそふで、グラントは兵學校卒業の人でありますから、出來得る丈接近してと考へて、矢張り敵を見ざる時の如く、依然として歩みを進め、恰も『恐怖』なるものを更に知らざるかの如く、ドン〳〵力みかへりて向ひました、スルト兵卒共は驚きましたな、何んと、我大將グラントと云ふ人は『渾身皆膽』とでも云ふべき人であらふか、我儕は顯が震へ、手が震へて物をも云へないほど怖ろしくなつて來たに、グラントは實に平氣な面して進まれるが、世に鬼將軍とは、我大將グラントの事であらふと、震へながら感服して從行て參りますると、グラントの方は又た別で、グラントの心になつて見ると、仲々鬼將軍どころでない、實は怖氣將軍で、怖くて〳〵堪らないのだ、幾度か遠方より滅茶々々に發砲しよふと考へたり、又はいよ〳〵堪らなくなりて、逃げんと思ひたりして、最終には殆んど目も見へず耳も聞へぬ位に逆せ上りて、皆無分別がつかなくなつて仕舞つて居たのであ

るそふです。

然る處一段こゝに面白きことは敵軍の方です、これは南北戰爭の終りてから後の話しでありますが、一日偶然或る處でグラントが、此初陣に向ひたる時の敵の大將何某に會ひましたるとき、某將軍の話に、グラント將軍誠に君の大膽には恐れ入りました、實は何年何月何處の戰に、僕は初陣の事とて怖氣ながら君に向つた處が、一向君が發砲もしない、又た更に退きもしない、ソコデ愈々怖氣がつき、よつぽど我慢は致しましたが、とうとう遂に浮足となり、君にサン〳〵やられた、イヤハヤ君の膽力には恐れ入る、無鐵砲には辟易した、と諧謔交りに語りますと、グラントは亦大口を開て、是れは實に面白い、拙者も實は如此〳〵と、盡く前條の次第を語り、君の漸く逃げ始めたのを見て、始めて勇氣を回復した位で、拙者の怖氣は腹より胸に來り胸より殆んど喉にまで上り、已に息氣も出來かねんとする有樣で御座つたと、腹藏なく己のが當時の臆病を白狀して笑ひ興じたりと申します。

勿論幾度も戰場を經て千軍萬馬の間を往來してからは、斯ることもありますまいが、初陣の時には如何にもソンナもので御座りませふ、而て見ればナポレオンが實驗談の如く、其れは少々の辛抱の較べ合ひで以て勝負の分るゝと云ふ事は眞理に相違御座りませぬ、友人留岡幸助君は泥棒學を研究して監獄改良に從事した方ですが、其幾千人と云ふ泥棒を驗べての話しに、泥棒が人の家に忍び入るにも、仲々恐怖ものだといふことで、雨戸をソット開けて見るに、內より確りと錠締のついてある家へは、却つて這入り易いものだが、開けて見てスラリと開く家は何となく心持のよくない者であるそうで、グラント將軍の敵の談しにも、かの時グラント將軍が遠くより發砲して進んで來たのであるならば、左程にも怖氣のつくことなかりしならんも、グラントが平氣な面してズラリ〳〵と敵前に向つて進んで來たには、有擊に膽玉をこれに呑まれて、いよ〳〵薄氣味わるくなり、遂に膽負けをしたと申したそうですが、ナーに、グラントもあの通りで、敢て膽の座つて居た譯でもないが、辛抱角べで勝つたのである、どうせ死ぬか生きるの場合であるから、仕方がないと

度胸を定めて、何んでも思ひ切つて覺悟をするのが肝要です、決して干戈の戰爭ばかりでは御座りませぬ、世上は百事戰爭ぢや、ビク〳〵して居ると、却つて丸が當りますぜ、此方斗り怖いのでない、彼方も矢張り怖いのであるから、劍術の極意にもある通り『身を棄てゝこそ浮ぶ瀨もあれ』です、鬼將軍グラントも矢張り始めはあの通りであつたと考へて人生勝利の秘訣を此處より學ばなければなりませぬ。

7　ペートル大帝の勇膽

露國中興の祖ペートル大帝は九歲にして位に卽きました、然し年が未だゆかぬにより、其異母姉ソフヒアが後見を致して居りました、左れば初のほどは衝突はなかつたが、遂々とペートル大帝が生長するに從ひ、ソフヒアを煩累くおもふ樣になり、ソフヒアに於ても以前の如くに獨斷で壓へつけることが出來なくなり、遂に大衝突を起しました。扨でソフ

ヒアはペートルを無きものにせんと欲し、ペートルはソフヒアを押籠めんと欲し、相方各各味方を率ひて、こゝに大騒動を釀しましたが、つまりペートルの勝利となり、ソフヒアは畢に押し込められて仕舞つた、然し殘念で耐らないから、色々陰謀を企て居る中、こゝに舊近衛兵の大將にて、當時大不平で、ペートルを怨んで居るものがある、因て此者と相謀りて、ソフヒアがペートルを暗殺せんと企てたるところより、ペートルが大勇膽を顯はしたことがある、其一條を今こゝに擧げやう。

夜の十一時頃ペートルが將に寢床に就かんとしておると、驀然しく眞青になつて、御注進〳〵と飛び込んで來るものがある、何者かと誰何すれば、侍從某が恭しく跪いて、『只今二人の將官にて某々と申すものゝ申出でましたには、今夜十二時を相圖として、陛下を暗殺せんと企つる徒黨某處に會合し、議殆ど熟しました、是れはソフヒアを始め、舊近衛大將某等の發頭にかゝり、餘程の人數もある樣子、今夜不意に宮殿を襲ひ、陛下を一夜の間に無きものにせんとの謀略、實は右二人の將官も、是れまで一味加擔の連中で

ありましたが、陛下當今の御威風を想ひて、畏ろしくなり、こゝに反忠に及ぶとの申條、如何取計ふて可かるべきや』と戰慄しながら申上げました、スルト、ペートルは豪膽無二の稟性ゆえに、神色自若として、少しも動ずる樣子なく『左樣か然らば我が近衛兵に急命を傳へ、一は宮殿を保護し、一は早速先方に向ひて、彼等巨魁連を縛し來れよ』とありました、ソコデ侍從は畏りて其の如く致しました、然しペートルは元來如斯騒動が至極好きな人であるから堪らない、暫く近衛兵の來るのを待つて居られたが、何んだか、かの巨魁共の集會して居る處へ往つて見度て耐へ切れなくなつたから、ソツと便所へゆく振をして窃かに宮殿を拔け出で、侍從より聞きとりたる、例の巨魁共の集會所へ來りて見ると、如何にも内は賑かにて酒宴の態なり、そこでツカ〳〵と階段を上がり來りて、トン〳〵トンと戸を叩きますと、内より誰だと尤むるから『何に予だペートルだよ』と應じますと、内では不思議でたまらない、然し何に樺ふものか、人の口吻をつかふにせよ、一人二人の樣子故『開けて見ろ〳〵』と云ふ處で、ギーツと『さあ這入れ誰だ』と戸を開けてみます

と、眞違ふ方なき、ペートルがニューと長靴を穿て這入つて參りました、皆々〳〵ギョツト愕きました、然し上座に控へたる巨魁の隊長舊近衛の大將某は流石軍人の頭丈ありて、更に動ずる色を見せず、わざと優然として『これは〳〵陛下、どふして今頃此處へ』と申上げると、ペートルは莞爾として『イヤ卿等の知る通り、予は時々夜遊を好み、供をつれては煩勞ゆえ今夜も閑靜なる夜景を賞しつゝ、暫時此邊を逍遙して居れば、大層こゝが賑かなる樣子、因て一寸寄つて見たのぢや、イヤ大層なる馳走ぢやな、仲々皆々大愉快の態ぢや、ドレ一杯ビールでも酌いで貰ふかい』とヅウツと手を伸て、傍に有會ふコツプを取て巨魁の隊長の前に差し出しました、何と大膽な振舞ひでありませぬか、こゝですぞ、英雄人の膽を奪ふと云ふのは、支那で云ふなら鴻門の會だ、維新で云ふなら、勝海舟が西鄕を品川に訪ふたときの光景、面白いではありませぬか、處で逃げる奴は追ひ驅け易いが、如何大膽に出られては、仲々容易に手出しの出來るものではない、因て巨魁の親方も暫時呆氣にとられて居りましたが、左あらぬ躰にて『其れは〳〵』とビールの大壜を傾けて之に濺ぎ

『先づ〳〵此方へ』と上座を讓つて、一席後へ引下らふとしたるとき、右大將の次席に控へたる某が、時分はよしとや思ひけん、此のゴタ〳〵まぎれに一寸大將の耳に口寄せて『それやつて仕舞ひませふ、願ふたり叶ふたりだ』と云ふと、大將は目示しつゝ、小さな聲にて『まだ〳〵時來ぬ少し早い』と申すとみえましたが、之を聽きとりたるペートル大帝は、居丈高く立起り、大音聲にて『汝の時が來らぬなら予が時が來りたるなり』と云ふや否や、忽ちビールの大壜を握りて之を大將の面部目がけて投げつけました、左れば『ソラ露顯だぞ、やつて仕舞へ』といづれも動搖めき騷げども、一ツはペートルの膽力に呑まれ、一ツは見る〳〵中に、ペートルの爲めに數名其場に擊ち倒されましたものだから、其勢に辟易して逡巡つゝある間に、漸く驚けつけ來りたる、ペートルの近衛兵の爲めに皆皆捕縛されました。

先づ談柄は是丈であります、只だ〳〵子供を喜ばせる英雄譚であつて、一向諸君には益のない樣思はれませふ、然し此處が一ツ考へどころで、ペートルが帝王の身を忘れて、わ

さ〳〵危險の處へ出掛けて行つたと云ふことは如何にも粗暴な談である、暴虎馮河は君子の取らざるところ、然しながら其の英氣の澎湃として止めんと欲して止むるべからざりし處に注目し玉へ、此時ペートルは廿歳を少し出た計りである、二十歳前後には此位の英氣がなくてはなりませぬ、アレキサンドルでも見玉へ、フレデリツキ大王でも見玉へ、又近くは我朝の信長、家康、太閤等を見玉へ、而して又た更に維新諸英雄の跡を尋ねて見玉へ皆己れ率先、士卒に先んじたのである、自ら其身を死地に入れて戰つたのである、亂世と治世とは違ふでもあらふが、心魂は皆一ツ事で、政黨を改革すると云ふも官紀を振肅すると云ふも、惡黨を征伐すると云ふも、思ひ切つて殺されるつもりか、大失敗して葬られるつもりでやらなければ何んにも出來るものでない、『河豚は喰たし生命は惜しい』の連中は到底役に立ちませぬ、ペートルの大英氣あり、而して始めて中興の大業が出來たのである。

8　大政治家ピツト

英國の大政治家にピツトと云ふが二人ある、一人は父で一人は其の子である、父の方は大ピツト若くは老ピツト又は爵を受けてよりチヤタムと言はる、實に英國十八世紀中一と數へて二のない人物。子なるピツトは人物の小なる處よりではなく、只だ其の子たるが故に小ピツト若くは若ピツトと稱へらる、此の者はナポレオン一世時代に英國の大宰相として大反抗を試み、英國を擧げて佛國に敵せしめたる又た此れ一代の大英雄、併し本題のは父なる方のピツトである。

吾人は英國の十八世紀時代より見れば直ぐに我が今日の日本に聯想し來る、イヤ實に其れは非常なるもので前段にある、サムエル・ジョンソンの樣な硬骨男子も遂には其の惡習に感染して、其の身を售るに至つた始末であるから、其の當時社會の腐敗が如何に太甚し

かつたかが能く分かる。考へて見れば馬鹿〳〵しい、一人廉潔を以て立つて居た所が、誰れも賞めて呉れるものは無く、却つて偏屈者ぢや、潔癖ぢやと人の嘲笑ふて交際ひ呉れぬ世の中、己れは額に汗して働き、若くは獨立の筆を執つて漸やくパンを拵いで居るのに、傍らを見れば、一寸節を曲げ筆を枉ぐれば、容易く千百の金が舞ひ込み、醇いものも食ひ美しい物も着、別莊も建て暮すと云ふ次第。ジョンソンも遂に馬鹿〳〵しく爲つて、畢にあの様に爲つて仕舞つたのである、然るに爰に其の高潔は日月と光りを爭ふと云ふ程の大人物が表れた、是れ卽ち此の大ピットである。

當時の總理大臣と云ふは、ワルポールと云ふて其の時代の産み出したる如才なき人物。『何んでも今の奴輩は豚の様なもの、食物さへ與へてやれば、喝々喉を鳴らして喜んで來る、政見も主義もあつたものでない、皆な我利々〳〵亡者だから、少しく黄金湯を浴すれば其の骨忽ちグニヤ〳〵に爲つて仕舞ふ、眞に樂なものぢや』と。斯う見當を附けて、大抵の議員は皆買收して仕舞つて居る、或る時此ワルポールが國會に臨み、滿場の議員が鹿爪

らしく力身込んで並んで居るのを眺めて、窃かに側らに在る書記を顧み、あの様に力身んで居るが、皆な定價付きだよと云つたと謂ふ、此れは、有名なる談しで、今日日本議員と殆んど變らぬ有様であつた。

然るに茲にウキリヤム、ピットなる者が現はれ出た。此者は地方豪家の子で、今度其の故郷より選ばれて國會に出て來たものであるが、資性極めて高潔、品行極めて方正、腐敗の當時青年にしては實に珍らしき人物、然るに此の者夙に政界刷新の大志を懷き、十分に學識を養ひ、十分に辯舌を練り、此時既に議會を呑んで控へて居たものであつた。

此のピット其始めは默つて控へて居たが、ソロ〳〵其の大志を遂げんと欲したところで先づ第一國會議員の中にて比較的淸廉の青年を集め始めた、兎角大事業を爲すには青年を味方とするに限る『老いては則ち得るを思ふ』で、妻が出來る、子が出來る、そして關係が多く爲つて來れば、從つて獨立の氣魄も縮まる様な譯で、ジョンソンですらあの様であるから。然し其處に至ると、青年は比較的氣樂で、繫累が尠いから、尤も目下ハイカラー

と云はるゝ先生達は、比較的青年の癖に虚榮を飾りたく爲つて、其の『得るを思ふ』老人の剩り屑を貰つて有難がつて居るが、此れは全く別問題として……。

斯くてピットは數人の青年議員を集めて『扨て諸君、實に今日の腐敗は、將に絶頂に達して居る、此れを刷新せんには官宅を構へ虚榮を張り、馬車などに乘つて威張りたがる滔々たる我利々々亡者は迚も相手に爲らぬのである、依て余は今後諸君と共に第一買收されぬと決心し、生活を粗にし、其の志を高うし、正々堂々、上は總理大臣の不埒、若くは宮中の弊事より下は此等腐敗議員の醜行惡徳を、頭より喝破し呉れんと思ふが諸君其の仲間に爲るや否や』と。斯く言ふと皆な奮然として之に與みし、遂に少數ながらも愛國黨と云ふ名を冠せしめて議會の一隅に其の居を占めてドン〳〵ビシビシ行り始める樣になつて來た。

此のピット學識は固より、膽力もあり、理財の才も充分具へて居たが、尤も長ずる所は辯舌であつた、當時米國より來て居た、ベンジャミン、フランクリンも彼れの演說を聽い

て吃驚し、彼のローマのシセロ希臘のデモセニースの辯舌などは何の樣なものであるかと思つて居たら、今始めて聽くを得たと云ふた位であつた。

然れば此の愛國黨が少數ながらも、議會の一隅より矢を放ち鐵砲を打ち、時々ピットが大砲を放つから堪らない、當時の王ジョージ三世もワルポールも少々弱つて、此れを買收し始めたが應じない、ピットの家に行つて見れば、他の議員とは異つて、實に壁落ち玻璃破れ、身は又たパンと水と位で暮して居るが、任ずる所は大したもので、天下を睥睨して控へて居り、寧そ取るならば千や一萬の端金でなく天下を取らんと云ふ面魂ひを爲て居つた。

併しワルポールは又た之を見て笑つて居た。ナニ元氣で威張つて居るが、今にジョンソンの樣に爲るであらう、少しの間の辛棒である、五六人の青二才が叫んだところで議會の多數を占め得ると云ふでもないから、暫らく打捨てゝ置かうと考へて居た。然し一年と經ち二年と經ち三年と經つても、一向ピットは節を屈せず、矢張り諤々侃々と、叫んで居る

と、此に一大事件が現はれて來た。

夫れは外でもない、內腐敗すれば、士氣外に沮喪すると云ふのは當然の事で、エリサベス以來今迄强大を誇つて居た英國も追々佛蘭西との競爭に負け、北米加拿太に於ては、散散に敗られ、東洋の印度に於ては、非常に凹まされ、宇內到る處に恥辱を受けた、然し愛國憂國の義憤に缺乏を來して只だ商賣根性一片に馳せて居た當時の英國人民は、迚も起つて之れに抗さうと云ふの氣には爲らなかつた。

併し段々戰さに敗られ競爭に凹まさるゝ日に爲れば、隨つて貿易地を奪はれ、利害の上にも大影響を來すから、漸やく此の點より醒め來つて、此れではならぬと言つて居る內、例のピットは『それ見ろ士氣の沮喪、元氣の缺乏は忽ち汝が利害にまで大關係を及ぼすではないか、汝が利害のみではないぞ、國家の利害にも大關係を及ぼすではないか、其れと言ふも、內ワルポールの樣な幇間宰相を頂き、腐敗極まる議員に支配されて居るから、斯うなるのである、醒めよ醒めよ、眼を醒せよ』と愈々益々叫び始めました、扨で英國人民

も皆殘らず腐つて居ると云ふのでもないから、ソロ〳〵氣が附き始むると、追々堪らなく爲つて來て、如何にもピットの云ふ通り、斯くてはローマ、グリシアの跡を踏んで、國の滅亡せんこと火を見るより燎かであると云ふので、追々ピットに贊同し始め、腐敗議員の內にも悔悟してピットに與みするもの多くなり、世上にもピットを助けよと云ふ呼び聲が高く爲つて來て、到頭ピットは議會の大立物に爲つて來て、ワルポールも斥けられ、ジョーヂ王も戰慄し、國民全體も『ピット出でずんば蒼生を奈何』と云ふ迄に爲つて來た。

如何です、彼れは節を賣つた、賄賂を取つたと怒鳴つた所で、本人も其の連中なら何んにも爲らぬ、併しピットの如く其身に非難せらるべき汚點のない者に出られては堪らないウーの音もスーの音も出るものではない、實に眞理と誠の力と云ふものは豪いものである尤も眞理を叫び至誠に充ちて居ても、其れ丈の力量がなければ仕方がない、辯もなく、學もなく人を動かす力も無ければ、夫れは大影響を及ぼす譯には行かぬ、此處は今時青年の考ふべき處で、只だ夫れ慷慨悲憤、不平を鳴らして時の腐敗を罵つて居ても詮方がないが

然し此のピットの様に充分實力を具へ來つて、叫ばれては社會の動かぬと云ふ筈はないのである、依つて今時日本政海の刷新を圖らんと云ふ大志ある青年は能く此の實力と至誠と云ふ二點に注意せねばなりませぬ。

一言にて曰へばピットは國民の土臺に立つて政治を行ふたる大人物である、即ち時の國民の要求を滿足せしめんが爲めに出たものである、ドウも今日の日本の政治家は、兎角目前の策のみを考へて、此國民全體より動かし來ると云ふ處に眼の達かぬのは殘念である。

开で愈々英國の民が隋弱に爲つた結果、外は散々戰さに敗け、內は己が位置のみを考へて居る議員政治家で滿ちて居たから、一向本當の政治が出來ない、數十年の間買收政略で、時の王並びに宰相が十分世の中を腐らして居たから、人々の骨がサツパリ亡くなつて居た、併し斯くて何日までもあるべきにあらず、誰れか鐵腕を揮つて政治の舞臺に出で來るものがなくんば、國辱は勿論の事貿易上に大影響を及ぼして、生活上の大問題となつて來た、凡そ生活問題ほど、人間全體を動かすものはない、百姓でも旱魃になると、

人殺をしてまでも水爭を始める、佛國大革命も遂に喰へなくなつて破裂した、开で前申す通り今の處、國辱を回復し、貿易を保護し、生活問題に大影響を及ぼさぬ樣茲に大刷新を施すべき大手腕家を得ねばならぬが、此れは、ピットの外にあるまいとの考へを、國民が起し始めた。

するとピットの友人でデボンシヤイアーと云ふ一貴族が、如何にも左樣と心得て、時の王ヂヨーヂ二世と心易き處より、懇々と忠實に、英國の危機に際し居ることを說き立てると、ヂヨーヂ二世も遂に同意して、然らば汝を首相としピットを內務大臣に据へて一つ內閣を組織せよと云ふ事を命じた、开でピットに此れを話すと、宜しいと快諾して、愈々內務大臣と爲つたが、此時實に非常に果斷を行ふた、之れを日本に譬へて見ると、元老でも華族でも、議員でも、豪商でも構ふ事は薩張りない、賭博打つ者は片つ端より縛り附け、地位を利用してコンミツションを取つたものは、遠慮會釋なく之れを法律に正して嚴罰し百鬼夜行の上に日月を輝かして、夫れは實に見られたものでない、上流者の醜體を普ねく

國民の目に見せしめた、其の上大膽なる事にはヂョーヂ二世の不品行迄も侃々諤々と攻撃して、上の好む所下之れより甚しきものありと云ふ筆法で、やるのやらないのと夫れは實に酷い勢ひでやつ附けました。

其處で國民は心地快く思つて之を歡迎したが、王を始め元老、華族、政治家、盜賊に類する豪商抔は、堪らなくなり、ピットには叶はぬが、デボンシヤイアーの好人物なるに突け込んで、此れを攻めて攻め上げて、到頭首相の座を退かしめた。

ピットは元より期したることであるから、笑ひながらデボンシヤイアーと共に野に下つた、而て昵と國民の樣子を見て居ると、サア國民は承知しない。何故デボンシヤイアーを辭職させたか、ピットを野に下したか、今日の天下、ピットを措いて他に人あらずと公言し、倫敦市の如きは市會を開いて吾人は何處迄も、ピットを頂かんと欲すると云ふ決議を爲した、すると此れに倣ふて日本で云ふなら、横濱市も、大阪市も、京都市も、其の他諸縣會に至る迄、皆な同じくピットを頂かんと云ふ決議を爲した實に豪い勢ではないか。

其は兎も角も、そこでヂョーヂ二世は更にニューカツスルに命じて、新內閣を組織せしめた、併しニューカツスルとても、今日の勢ひ、ピットを除いては內閣を組織すること能はざるを見て、更にピットに交渉すると、ピットは襟を正して『足下眞に我輩を用ゐんならば、內務大臣ばかりにては事足りぬ、內務、外務、軍務の三職を授けずんば本當の仕事は出來んのである、之を任かせよ、而して失禮の樣であるが、君が一々我輩の言を容れ我輩と共に進退し、我輩に首相の實權を授くるならばやつて見樣』と云ふ。ソコでニューカツスルも一層やらすなら、何も、蚊もやらせると言ふ大腹になつて、直ちに此れを快諾し、愈よ其の如くして新內閣を組織した。

ピットが大全盛時代は卽ち此の時で、直ちに陸海軍を改革し始めた、此れは內務大臣ではやれたい事で、日本でも此の方面が尤も六ケ敷いと思はれる、陸海軍が政治の外に獨立して居ては迚も本當の仕事は出來ぬ、併し之れを改革すると云つても、只だ之れを敵にすると言ふ意味ではない、適當な人物に適當な地位を得させる事である。

左ればピットも其の通りにして、當年取つて漸やく三十三歳なるウルフを、少佐より直ちに少將に榮轉せしめて、此れを加奈太の總督として、北米に送り、佛蘭西軍を打たしめた、處が案の如く大成功して佛軍を凹ませ、加奈太全體を英國の領地にして仕舞つた。

サア左樣爲つて來ると所謂る勢ひで、ウルフの成功はピットの成功と爲つて、ピットは軍人界にも大立物と爲つて來て、遂には歐洲大陸の大戰爭にも喙を容れ手を伸して、時の普王フレデリツキ大王を助け、露、佛、墺を相手として天下を蹂み躙らんとする氣勢を顯はして來た。斯くて已に權力が手に入れば〆たもので、行政も、財政も瞬く間に整理し去つて英國萬歳、國民萬歳の御代として仕舞つた。

我輩は此のピットの傳を讀む毎に實に壯快で堪らない。先づ身を修めて國を治めんとするの志を立て、次には大腐敗の中に立つて巍々乎動かず、遂に國民の呼聲に迎へられて大手腕を揮つたと云ふ、此處ぢや、此處が所謂る大政治家たる處、而して今日に必要なのである、今日の自稱政治家は此等大人物の傳紀を讀まぬのであるか、讀んでも分らぬのであるか、何故何時迄も、小策を弄して孑々跳ね廻つて居るのであるか、一向其の見當が分らない。

然し我輩は此のピットの末路に就ては、餘り多く云ふを好まない、ピットも此處迄やつたが、其の末路は餘り面白くなかつた、餘り過激にやつたものであるから、少しく神經に狂ひを來して、末路にはつまらない內閣を造つて人の笑を來した事である、而して之に就ても思ふ、何でも全盛時代は永く續くものでないから、所謂刷新一段落を告ぐれば、其後を潔く後進に讓るのが順序である。

併し又たピットの死ぬ時が面白かつた、ピット今は貴族チヤタムと爲つて、內閣を退き單に貴族院議員となつて居たが時に年七十歳、病氣で殆んど起つことも覺束ない、併し其の時の內閣が卑屈なる平和の條約を佛蘭西と結ばんとするを聞くや、病床にあつて切齒を爲し、嗚呼殘念な事である、折角己れが英國を提げて、宇內に覇たるものとして置いたに、弱味噌の小僧が內閣を組織し、今に至つて我が英國の體面に泥を塗ると憤慨し、どう

しても一度議會に出て、怒鳴らねば死に切れぬと云ふ、开で醫師も止め、子息も止め、朋友親戚も、皆止めたが、一向聽かない、何しろ貴族院へ擔ぎ込めと云ふから已むなく、貴族院に擔ぎ込むと如何です、殆ど二時間有餘の演舌をしたと言ひます、そして怒鳴り始めると始めは小さな聲であつたが、段々大きく爲つて來て、遂にはピットが壯時に還り、實に雷電を轟かしたと云ふ事です。其の大精神の存する處は豪いものではありませぬか、而して演說了りて、反對黨が立つて反駁を試み、其の反駁を聽くや其終るを待ちかねて、復び奮然として演壇に立ち上らんとしたが、最早や老ひの身病氣の身であるから堪らない、其の儘倒れて氣絕したから、衆皆な驚いて、此れを馬車に乘せて家に送つたが、其の後蘇生はしたものゝ、間もなく死んで仕舞つたのである。嗟呼今や日本にピットあるなし、傳を記して慨然之を久ふす。

昭和七年三月一日印刷
昭和七年三月三日發行

【定價金壹圓七拾錢】

著作者　松村介石

東京市外下戸塚四六二番地
發行人　葛岡龍吉

東京市京橋區木挽町四ノ一番地
印刷人　川村清次郎

發行元　東京市外下戸塚四六二番地　電話牛込三五八一番　振替東京一四四八四番　北文館

不許複製

前日本女子大學校長 麻生正藏著

菊版上製函入 定價金四圓五拾錢
總頁六百五十餘 送料 金貳拾貳錢

時代と民情に卽したる 家庭教育

人類の福祉の增進、文化の向上は各個人の性格及技倆の有無優劣によりて、決定せられ、各個人の性格及技倆は家庭教育に於て其基礎を構成せらるゝものなりとの見地より立論し、家庭教育の重大性を明示し、又女子の教育に對する父母の責務の深甚なる所以を力說して現下の我社會が切實に要求する兒童教育の效果を收めんとする者實に本書の目的である。其收むる所。第一篇教育の眞義に於て、教育の解釋。教育本領の史的研究。自我の實現。境遇適應。著者の教育觀の五章十數節。第二篇教育と遺傳に於て、教育效果の有無問題。遺傳の汎論。精神の遺傳の三章十數節。第三篇家庭教育に於て、家庭教育の基礎。胎內教育の序論と本論 家庭教育の原理。習慣養成の方法。本性格教育の六章數十節等。而して其所說が多年教育の要路特に女子教育の要衝に當られたる著者が自家の經驗と研究とにより講述說示せられたる點に於て特に異彩を放つて居る。

徳富蘇峰先生書簡
與謝野昌子女史閲並序 河合よしの著

現代母のなやみ

定價 貳圓
郵稅 十二錢

人は各其顏の異なるが如く其心も異なつて居ると同時に又人間としての、普遍的な共通の我といふものがあるとすれば更に人の子の母としての普遍的なもの即ち同じ惱みと同じ喜びとを持つて居るものではないでしようか。彼光輝ある明治大帝の軍國主義時代樗牛の理想主義時代に於て感激に充ちた青年期を生活して來た今の私と同年輩の世の多くの母達が今我子として持つて居らるゝ青年達の思想を觀察せらるゝ時どの樣な感慨がおありになることであらうか。此書を通じて其母君達にきゝたい。そは惱みある時是を人に語り明す事に依つて其惱みは半を減じ喜びは是を人に語り俱に喜ぶ事に依つて其喜びは倍加すと聽けば。

内容一部

○若き母のうたへる(歌)○老いたる母のうたへる(歌)○中等學科の改革○軍國主義時代の思出○我子に與へたる手紙○泣くな戀するな○鶴見祐輔氏の母を讀みて○思想善導の主役○現代に於ける母のなやみ○名士訪問記○勞資の爭ひ○ダンスホール行○濱口首相のお顏○叡山日記○歌論○近詠○等。等。

基督に歩みつゝ

法學士 牧師 谷口茂壽著

四六版並裝 定價金九十錢 送料金八錢

著者は中學時代に人生の意義、目的如何と云ふ人生問題に目醒め又高等學校時代に信仰の本質に對する懷疑の渦中に沈湎し又自由信仰に立還つたが、罪念の呵責に苦む律法的煩悶は、大學時代に著者を苦しめつゝ、不思議に聖書信仰へと導き入れ後、今や著者の胸中、活基督と動きなき信仰、煩ひなき平安盡きざる喜びの完全な、神の救ひが與へられた、本書は其信仰の實歴を叙したものである。

感謝と法悦の生涯

法學士 牧師 谷口茂壽著

四六版上裝 定價金一圓十錢 送料金四錢

世を擧げて不平、不滿、怨嗟、煩悶の聲のうちに人皆已が生活を詛はんとする時、著者信仰の道に立ちて、法悦にしたり、感謝の日常をよろこび、人の世の幸福を樂しみつゝ、「我病める時に喜びあり」の境涯を體驗して、宗教的慰安の無限なる事を高調する者實に本書の要旨である。祈禱あり、詩歌あり、小說あり靈趣津々。善く「別に慰むる者」ある道を悟らしむるものあらゆる人の味讀をすゝむ。

恩寵に育くまれて

法學士 牧師 谷口茂壽著

四六版並裝 定價金九十錢 送料金八錢

人生の根本義は人其意をなさんとする所にあるらずして、神の聖旨をなさんとする所にある所有の多寡や地位の高下や、其他生活狀態の千差萬別は、吾人に於て眞に未梢の事件である。神を畏れ、其旨を奉じ、悠々自適し又其隣人を愛しみ、共に生を樂しむもの。これ實に恩寵にぐくまれたものである。著者此高所に立つて世の愛慾觀、藝術觀、及人格の價値等を明快に解說批判する者本書である。

東京帝國大學教授　帝國教育會々長
文學博士　林博太郎伯監修

最新教育研究叢書

1
文學博士 入澤宗壽著
金貳拾錢 送料貳錢
現象學的教育思想の研究

著者の序に曰く『本書は現象學的立場よりせる教育論を叙說したものである。現象學は新しき立場として世の視聽を惹き、既に倫理、社會、美學等に適用せられ、教育の理論の基礎づけにも用ひられてゐる。それらは尙未完成のものではあるが、現代教育の理論と實際とに示唆する點が少くない。吾々教育に從事する者は、それを單に新らしき傾向として眺めるのみでなく、其眞髓を把捉して日常の生活に考慮すべきである。』と斯學研究の第一人者として著者の叙說は當事者の看過すべからざるものであらねばならぬ。

2
文學士 竹井彌七郎著
貳圓五拾錢 送料貳拾錢
勞作教育學の發達

勞作教育學は幾多の他の新教育思潮と異り、決して一時的流行ではなく、『我々の生活は「勞作社會」でなければならぬ』といふ根本認識に立つものである。本社會は「勞作生活」であり、我々の學校は「勞作學校」であり、我々の書は勞作學校論の發生から、現代の勞作教育學への發達を最も忠實に考察せるものであつて、苟も教育に關心を持つ士の必讀すべき良書であり、あらゆる教育家の最良の座右の參考書である。

東京帝國大學教授　帝國教育會々長
文學博士　林博太郎伯監修

最新教育研究叢書

3　陶冶論

文學士　村上俊亮著

貳圓五拾錢　送料拾貳錢

本書はケルシエンスタイネル最近の大著「陶冶論」を中心に彼の陶冶思想を述べたものである。彼の豊な教育的體驗と教育的熱誠とは教育學的認識に於てよりも教育的智慧の全一性に於て彼を現代ドイツ教育界の明星たらしめた。教育學的教授論的準繩に自由生氣を失つた我教育界の教育的叡智の全一的生命への無意識的渇望はこの「陶冶論」によつて多かれ少かれ充されるものと信ずる。

4　學習活動と教育活動

文學士　千種圓爾著

貳圓五拾錢　送料拾貳錢

中學校改正案は何處へ行く、最新心現學說「一形態說」は何。黴臭い中學校教授法の改造。以上三者を主眼とし。又次の如く。改正案から一社會要求に立ち且學習活動を導く教育活動の基本的見地を(社會的原理中心)。形態說から一その說の批判から學習活動の理解を(心理的原理中心)。教授法から一及以上二原理から新舊全教授法の組織を表現した。結局教育「實際方面」を直視した全體の組織の企てゞある。學校系統中央の中學校をその一例とした。あらゆる人就中教育當事者には是非讀んで戴きたい。

東京帝學大學教授　帝國教育會々長
文學博士　林博太郎伯監修

最新教育研究叢書

最新刊

第5卷　宗教教育概論

大正大學教授　陸軍教授　文學士　大村桂巖著

四六上製四百頁　金貳圓五拾錢　送料拾貳錢

宗教教育の必要なることは今日内外官民一般に之を認め、其實施に關する適切なる指導書の現はるゝことを皆な鶴首して待ちこがれて居る、此時に當りて本叢書は大村教授の宗教教育概論を社會に提供するの誇りと光榮とを有する、内容は、宗教教育の過去現在、宗教教育の意義及概念、宗教の意義及概念、宗教教育の目的及方法、小中學校、家庭及社會に於ける宗教教育の實際各教科に於ける宗教的訓練、教育家及宗教家の天職等が其重なるもの東西の思想を參考し、自家の創見を發表せられたるものである。要するに宗教教育實際指導の好資料書、教育當事者必讀の良書。

コ1651

東京帝國大學教授　帝國教育會會長
文學博士　林博太郎伯監修

最新教育研究叢書

6 川本宇之介著

二圓料金　五十錢　四十錢

社會教育の體系と施設經營（體系篇）

7 川本宇之介著

二圓料金　五十錢　四十錢

社會教育の體系と施設經營（經營篇）

本邦教育界が從來社會教育を輕視して、學校教育を偏重して來た結果今や學校教育は各方面に行詰りを來した。これ最近社會教育が益々その必要とその價値を認識され來つた所以である。然るに本邦の社會教育は從來その學的研究に乏しく種々の努力はあり、施設はあるがその教育的根據が極めて淺く弱かつた。是に於てか世人も社會教育の價値を疑ひ自ら之を輕視せんとしたのである。これは社會教育の一大缺陷であつた。著者は深く此の教育界の現狀を憂ひ本叢書第六卷に於て社會教育に體系を立て其の學的根據を明確に闡明し第七卷に於て內外に於ける社會教育の機關施設を詳述し且四十四個の挿入圖によりて其の實況を細示し大に斯道研究の爲め資する所あらんとして居る。本邦に於ける社會教育學研究の唯一の良參考書である。

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black